



增補  
頭書

別業圖

成

知 3

4617

2





頭書增補訓蒙圖彙卷之一

天文

此部小の日月星辰雨露霜雪乃をくひわら  
日月星辰の文章多し易曰仰見於天文



兩儀

兩儀

天地開辟のときわくして  
清らけりて天とありあり  
あてあたらけりて地とあり  
天と陽と地と法とを法  
湯は儀といふあり  
○七政は日月と五星と合せ  
てのふた七曜ともいふあり  
日月五星天の政とあり  
木星と歳星といふ火星と熒  
惑といふ土星と鎮星と云金  
星と太白といふ水星と辰星



頭書增補訓蒙圖彙

この本火王金水の五行の  
 星らぐりて陰陽とあり歳  
 とあり此五星と五緯ともい  
 ○太極天地のまこととまこと  
 陰陽のまこととまことと  
 事鶏子のまことと眞淳て  
 とくくつとまことと鴻毛の未判  
 とくく清湯かりの薄  
 靡て天とあり重濁りのと淹  
 滞て地とありあふあふと天  
 地開闢と其間万物生ど  
 用闢以前太極とい天地  
 陰陽のまこととまことと  
 ○國常立尊天地既よま  
 て其中に物わりりり草牙

大極



倭國

國常立

のおくと則化して神とあり  
 こま國常立尊といつての  
 始あり日本と芦原國といつて  
 此義かりと是より天神大地  
 神五代のいつとて人の代中  
 あり唐はて天地開闢  
 て盤古氏といつて人は  
 始ありこれより天皇五帝三王  
 とつて人の代とあり  
 ○倭日本と倭と号る事天  
 地開闢の後地皆ありて平  
 きし人の代とありてふとひ  
 き平地とありて後りつと  
 日本派と編といふ義とありて  
 倭國といつてあり

唐土



盤古氏

頁書拾遺補川後圖

○秋津洲といふ  
 人皇のしるしありと  
 神武皇帝と  
 奉る即位三十年  
 四月帝諸國小幸  
 舟は日本乃地  
 形蜻蛉小舟といふ  
 といふ秋津洲と  
 名づるありと  
 ○とも日本國の唐  
 中華の地より東  
 わるゆへ小日東と  
 も被素國ともいふ  
 又須彌山の南よ  
 たらゆへ小南瞻部



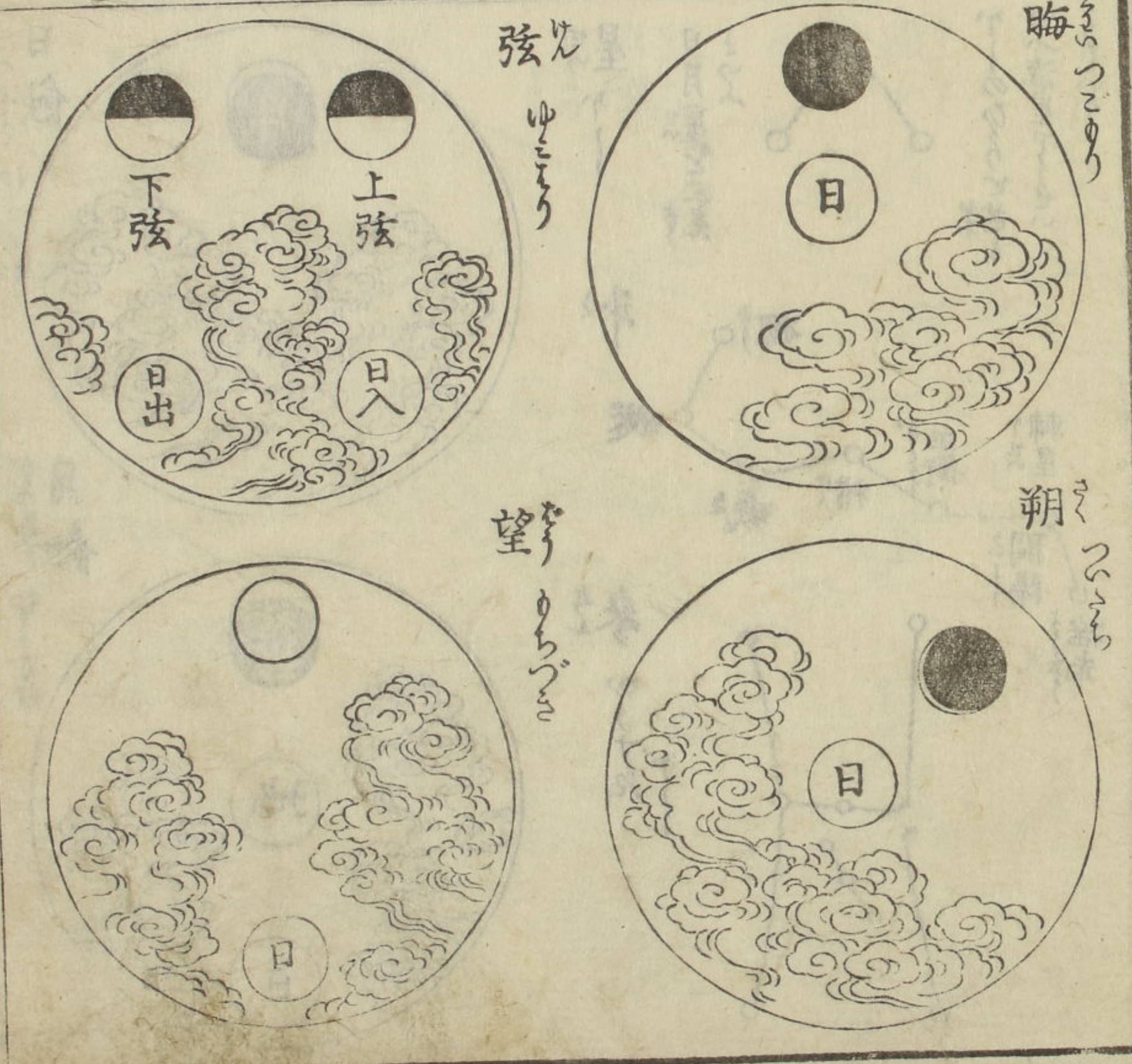
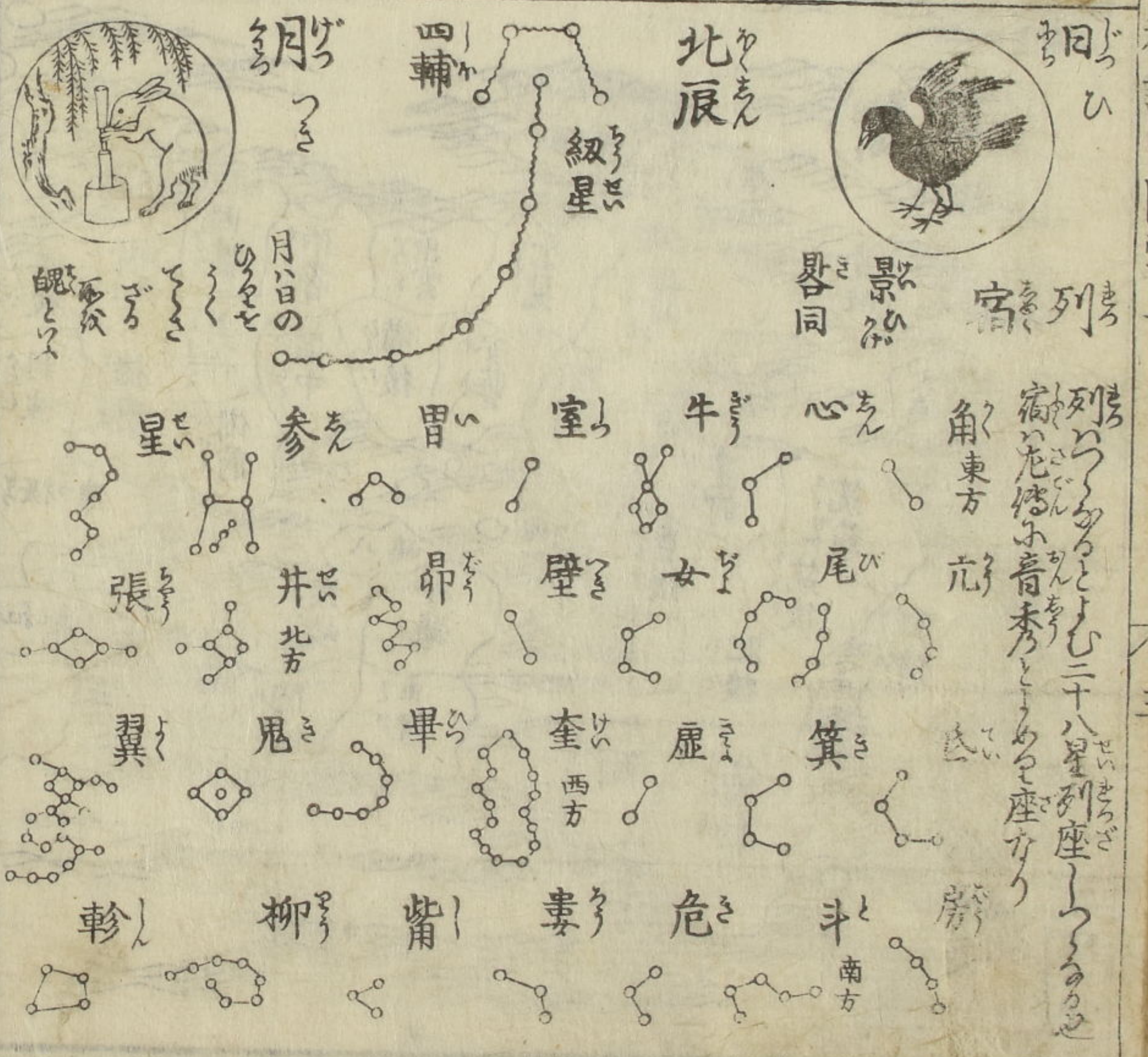
別ともいふ用明天皇  
 のとに五畿七道  
 の御代に十六ヶ國  
 に分ちて諸國守  
 護とて東武小將  
 軍ありて諸國守  
 護せり西京中國  
 天子の都とありて  
 すいね田地の敷  
 九十四万七千八百  
 石高貳千貳百八  
 万五千四百八十  
 石ありと



朝鮮國

○日湯の精多し空虚にして  
 の秋と免の法は獣かき多し  
 ○月の陰の精かり空虚にして  
 の秋と免の法は獣かき多し  
 ○北辰の極より天の樞より  
 一周天のめぐり半北極と樞  
 七星より四星あり  
 ○列宿此星天の東西南北は  
 志て四方各七星づかり合て二十  
 八宿なりと云ふと三十日は多りて  
 毎日八つづりさるるあり

○晦毎月大晦は三十日小晦  
 は二十九日と晦といふ月地下  
 かまて光かしてて晦の字  
 とくしとくひなり昏晦暗晦  
 のありあり  
 ○朔の蕪やわらふと云ふ月  
 は十五日より晦日までけつまで  
 又朔日よりとくアをそとドクを  
 明かすことと云ふ義にて朔といふ  
 ○弦は十五日上弦といひ下十  
 五日は下弦といひ上弦は西の方  
 下弦は東の方なり上弦は七日  
 八日九日下弦は十二日十三日十四日  
 にわると月乃光と云ふあり  
 ○望は十五日の事なり十五日の  
 日月東西ふひ望むゆい望  
 と云ふは月と云ふあり日

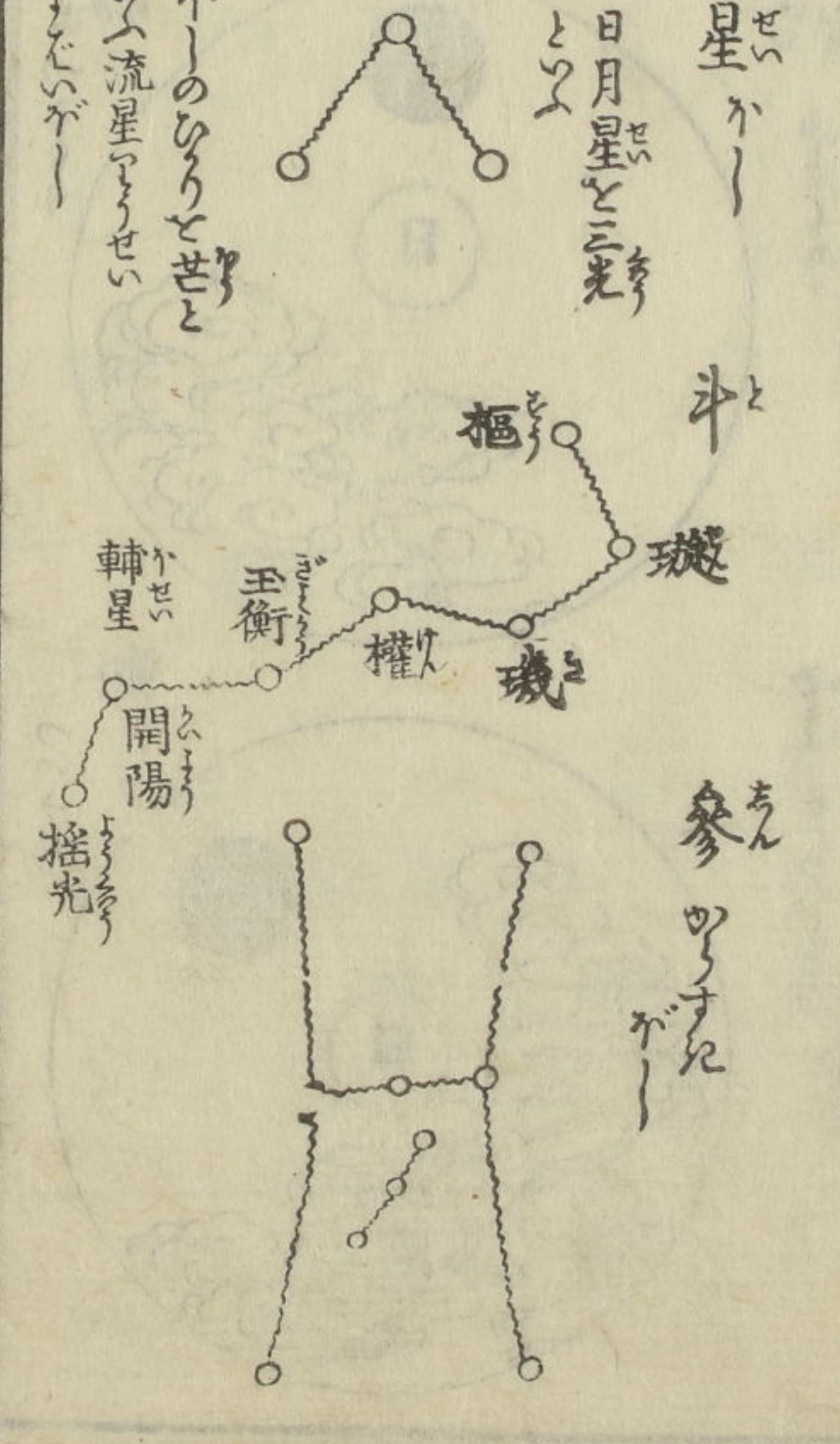


百八十四日

月お對して月の光地の方に  
て天をかり故に満月か  
○日蝕の日月天ふみて日の上  
かたの月下より朔日日月の  
會かり日月上下にあつて道と  
同して會をまじ地より身をとら  
る日月のさふちかり是日蝕  
といふなり

○月蝕月より光か一日乃  
まはたして明かりのかり日月  
道と同一とおひり地日月の  
さふちかりの光地を遮る月蝕と  
○星の湯精より湯精日と  
日よりさふちかり故に日生  
といふなり

破軍星より輔星のさふち  
○参星の西方七宿の一より俗  
に是とわしとせんがしつゝ西  
星の列座よりさふちなり  
○日卵星の西方の二宿より旄  
頭星ともいふ俗にさふちる星と  
いふ是かり星の列座同せま  
あつてさふちなり  
○牽牛の星の名あつてさふち  
ひびがしともいふ河鼓星とも  
いふ七月七日織女牽牛に嫁と  
いふ桂陽の武丁といふ仙人とい  
ふより七夕といふ事始なり  
○織女星の名あつてさふち  
七月七夕瓜葉と塵上にもる五  
色の多分筆に掛て懸てさふちる  
ふ三年の月ふかりさふちる是と  
いふ



巧算とも七ツ星ともいふ

○天漢の天河も銀河ともいふ

小鳥鵲翼のて橋と此河の橋

牽牛織女の二星の合とつり

○ま星の妖星なり此星出るも

昔とのぞいて新し改又火災なり

なるの瑞を俗に是と御光星と云

○華星の妖星なり色青王候死

赤の強國を白の共乱を天下

に災のるゝをわゝるゝ星あり

○太白星金星ありわたりとか

づく俗にわろこの明星といふ日にこ

きざらてゆくあり啓明ともいふ

○虚空へともいふやとともいふ

し大虚太空ともいふ天あり天の

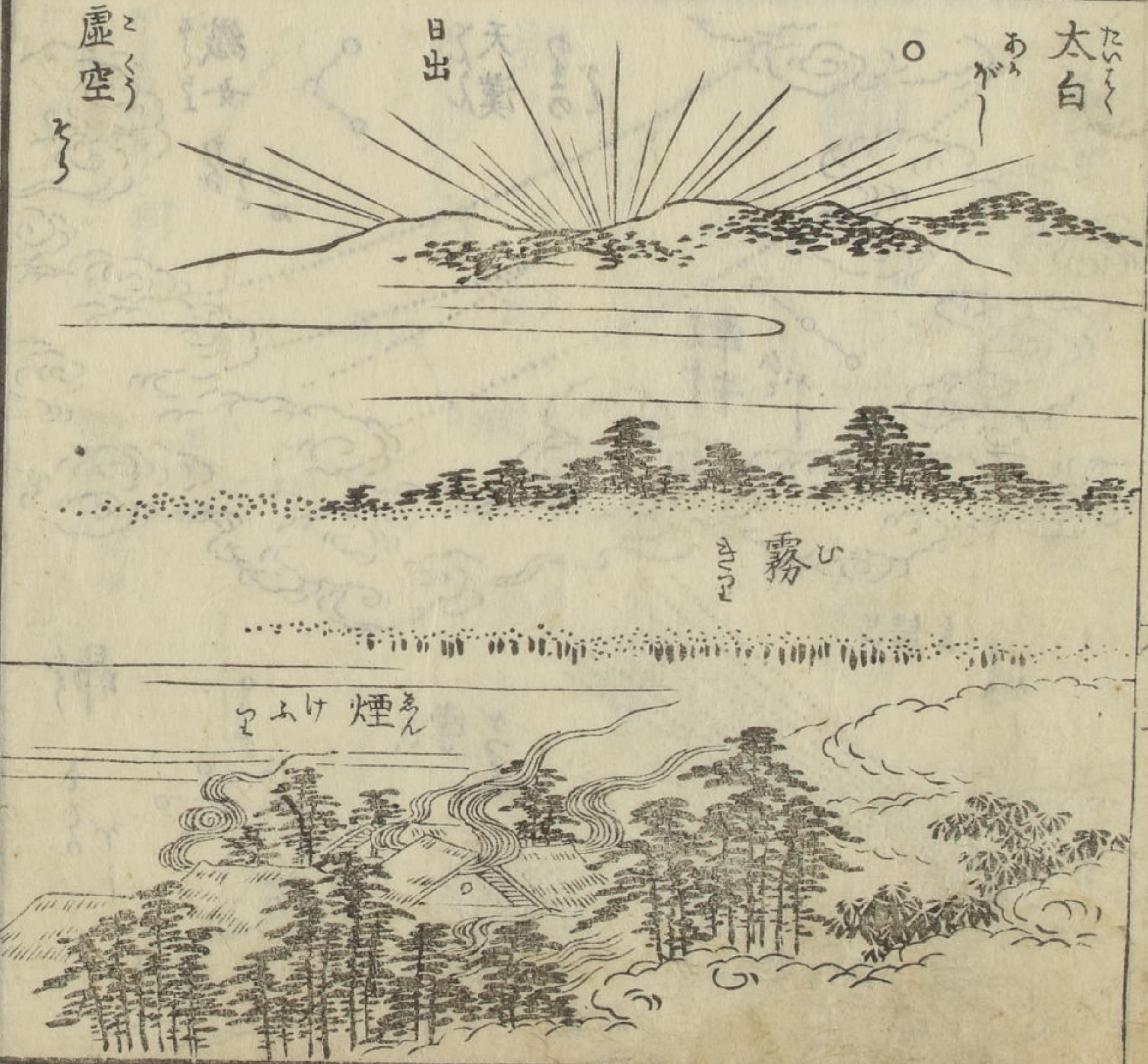
圓にして空こそて物ありてち

かりて虚空ともいふ

かりて虚空ともいふ

五言詩集

五



○霧は陰陽のみをまゝり生を

地氣のわけて天を氣應せりいふ

霧といふ天氣をわけて地氣應と

いふ公雪といふ風吹てまとう

とを霧といふ

○煙は火の作り氣あり烟同一

又水も煙の如

○長庚の金星あり日にちか

て入是と長庚星といふ俗に是

といひの明星といふなり

○風は大地の噫氣あり陽の熱

にして散とて陰の用とあり故に

風吹といふ土必く又旋風

風といふ

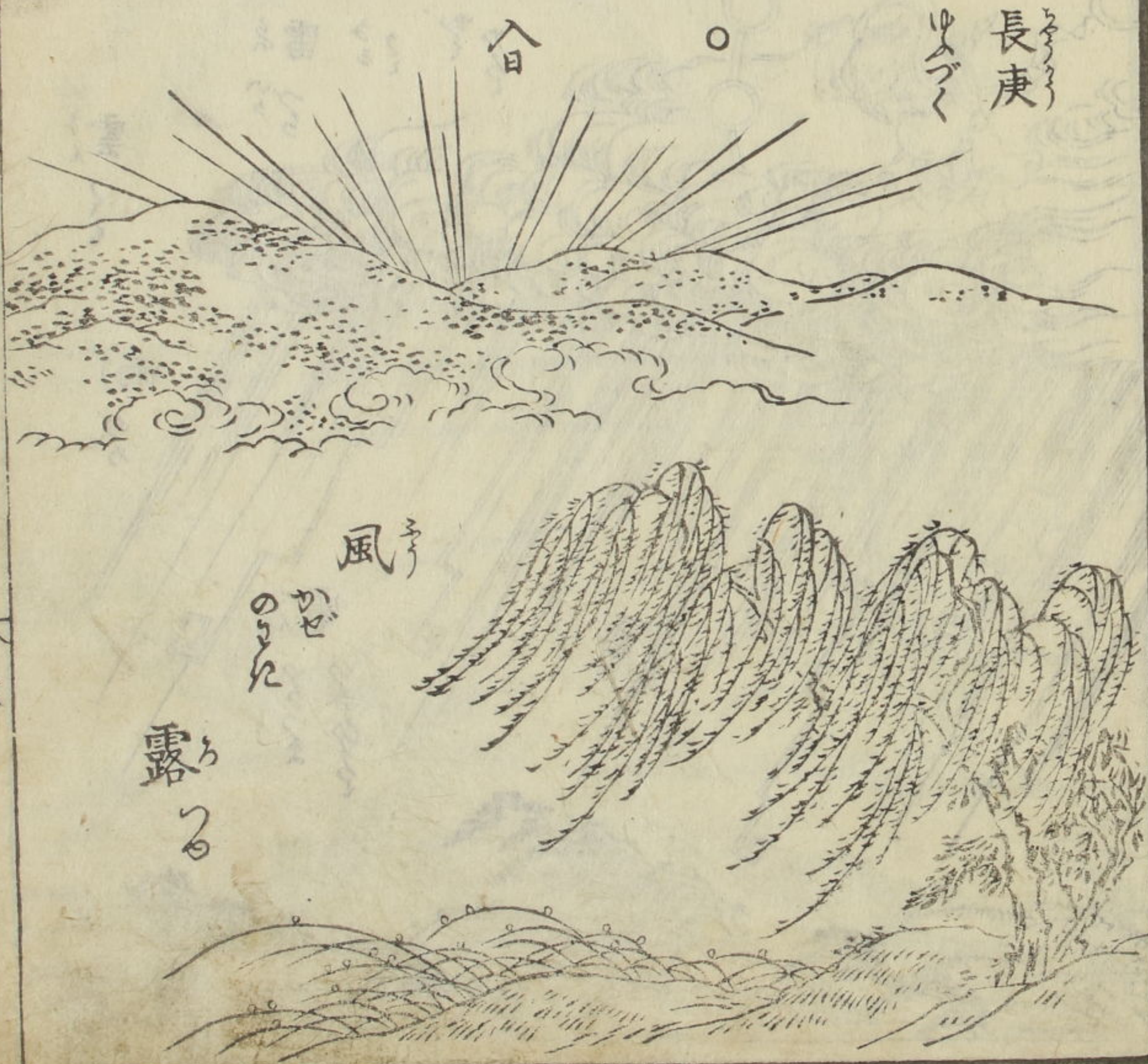
○露は夜氣露といふ陰の液

白虎通ふ露の霜の始なり也

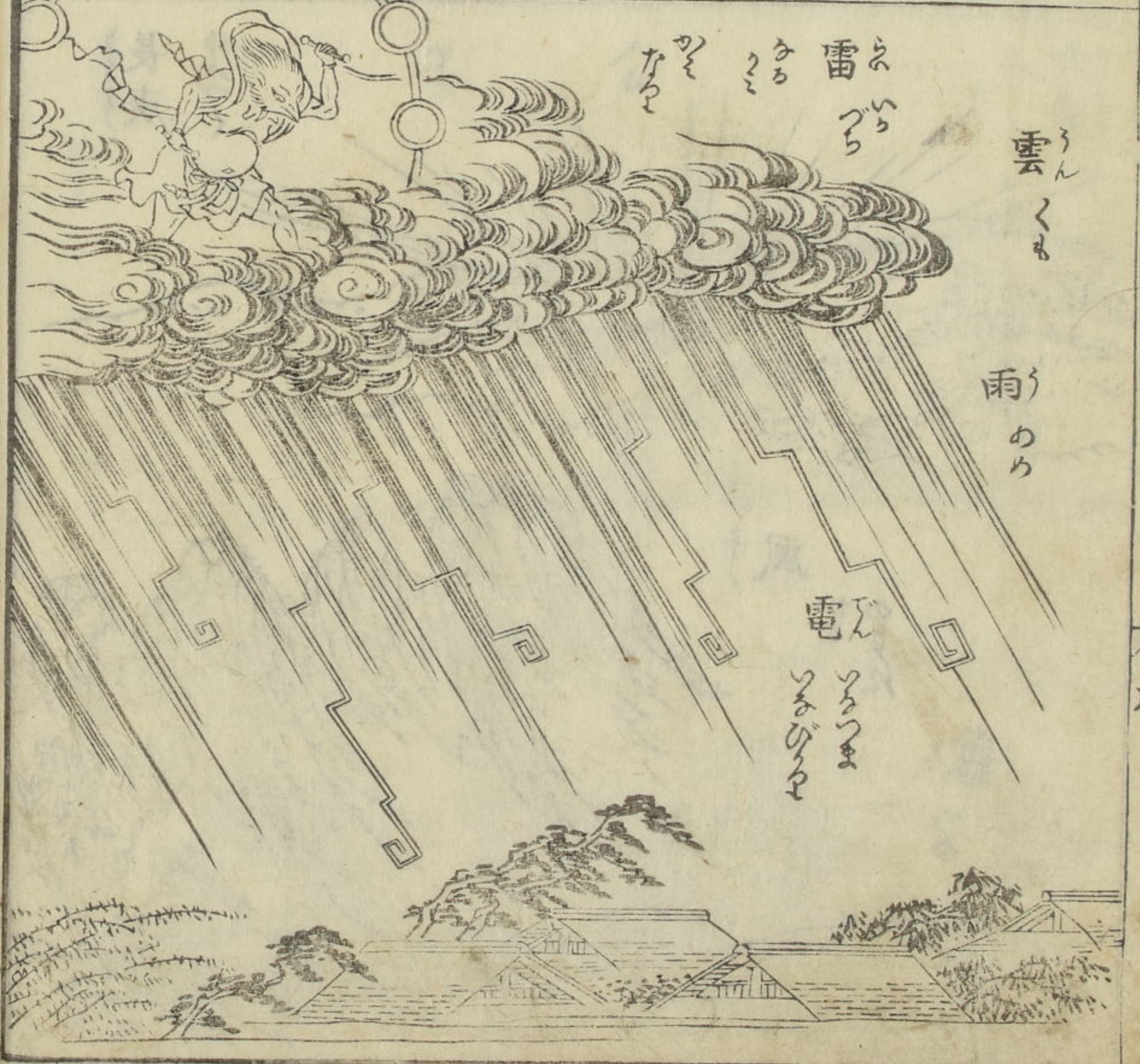
とて露といふ

五言詩集

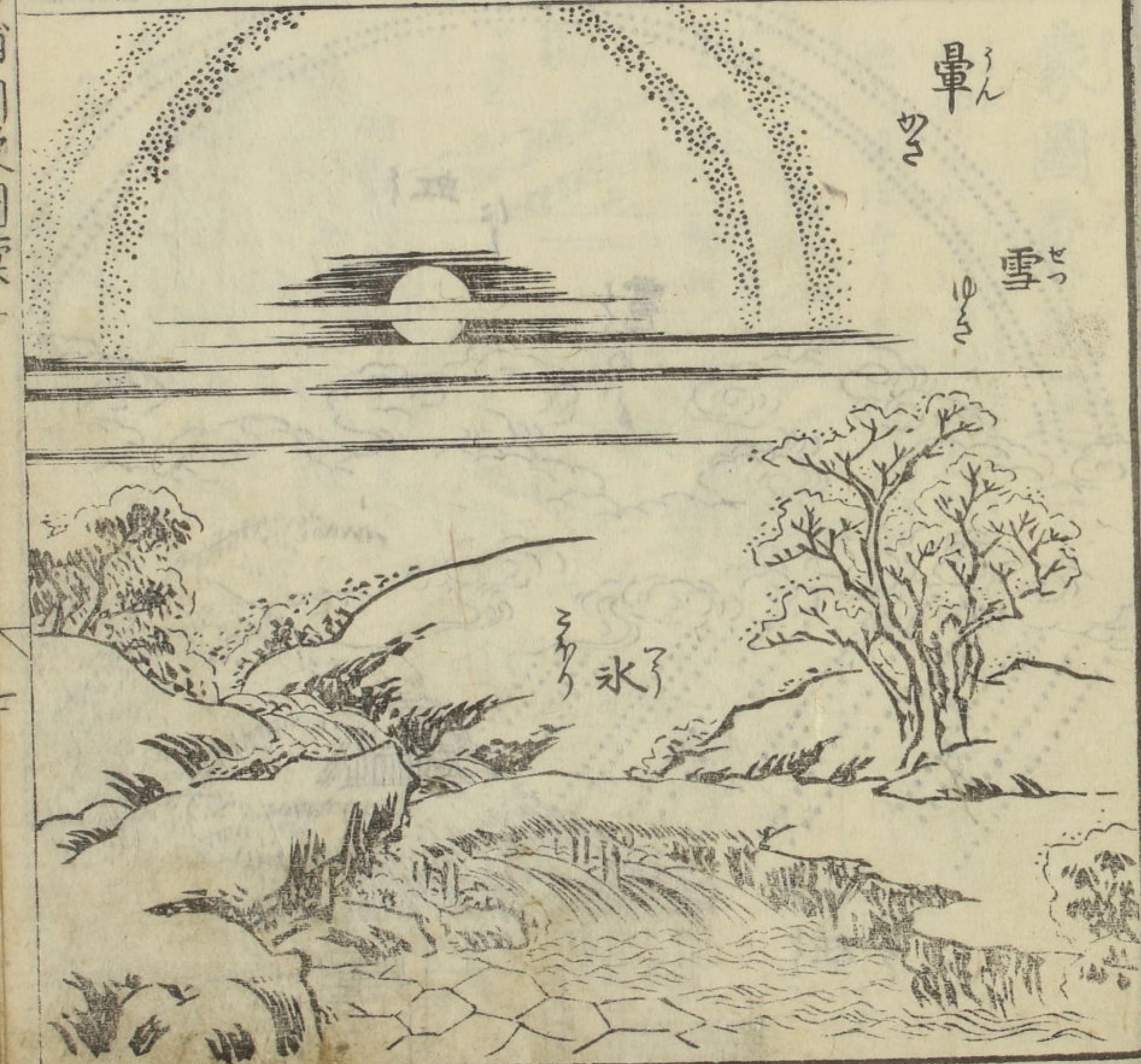
五



○雲の山川の氣かり地氣のや  
 して雲とかり天氣をうつて  
 かりあり雲の陰の跡あり  
 陽の用とかりみ雨湿の氣かり  
 ○雨の水蒸て雲とかり  
 雨とかりひくさる暴雨といひ  
 かりあり霖雨といひ夕ぐらひ  
 驟雨といひ時雨と樹といひ  
 ○雷の陰陽の激とる声なり  
 王充論衡といひ書小雷の秋二人  
 の力士のうて累々たる連鼓といひ  
 持右のふふ鞭といひくくうて声  
 とめとつり  
 ○電の二月小右この月陽氣軒  
 さんやて陰氣といふとの激と  
 るひつと電といふ俗にひひつ  
 つる妻といふ雷神と電母といふ



○暈の日月乃のつりの氣  
 かりとるつり日暈のつり  
 へひてり月暈のつり  
 三日のつりふ雨つりつり  
 ○雪の雨つりて雪となり天地  
 乃積陰わつりつりつり雨と  
 ありつりつりつり雪とあり  
 花とありつり雪といひ圓あり  
 と電といひ又銀花といひ出  
 花といひ銀屑といひ  
 ○氷の陰氣のつりつりつり  
 氷とかり氷と書りつりつり  
 氷と書べり氷つりつりつり  
 つり氷さんなり氷凍といひ氷  
 かりつりつり氷とつりつり洋  
 といひ氷室といひつりつり





○虹ハ日雨と交て竹貫てなると也  
 日のひりり雨にふりふりくく虹  
 わくわく朝ふ西にわり暮に  
 東ふあり色鮮なるは雄と  
 闇と唯いこと俗ふ蛇のいこと  
 蟬煉 電同ともふにトあり  
 ○電ハ雪よりりて圓なるは  
 電といふ寒氣つこといふ雪  
 なるそ輕く寒氣うすこといふ  
 雪かりてこひやと又電とも  
 瑤瑤玉粒碎玉銀米明珠  
 同し雪雨にまどりうは霞  
 とし  
 ○雪水寒いほどがたて軒  
 のあつらとこやうて氷柱とある  
 氷筋氷條とも書へ又氷竿  
 ともいふかん



頭書增補訓蒙圖彙卷之二

地理

○山ハ高大なりて石ありは  
 嶺ハ廣雅云山ハ産  
 万物と産とあり説文山  
 は宣なり  
 ○峯ハ山の端なり山太  
 て高と峯といふ山小に  
 たくと大といふといふ  
 かり唐はくは香爐峯日  
 本少くは富士峰といふ嶺同  
 ○巔ハ高山のつたなり絶  
 頂なり持經は采茶采茶令  
 首陽之巔といふ山巔とも



此部小の山川田園村丘村市のまゝひりり  
 地乃條理なり易云俯察於地理

高嶺ともいふ

○坂の坡坂多し山中の高くけり

とつら登り

○山嶽のけりき高山の山城如意嶽近江の比良の

が嶽か

○谷の両山の中れ流水なりと溪谿同し水谿にそくと谷

とつら山の間水わりの谷間と

○丘の土の高と所狭り又四方

なりと中央ひらりと丘の

とつら山同嶽死とつら

丘と嶽

○盤の石の多し盤石ともいふ

嶽の石の多し盤石ともいふ

カク

○巖のいんかゆりき石

のいんかゆりき石

石巖と巖のいんかゆり

詩の巖のいんかゆり

岩同

○崖の山邊あり山の一片

をいんかゆりき石

同し懸崖ともいふ

補俗ふけりともいふ

○瀑の瀧とも書なりかき

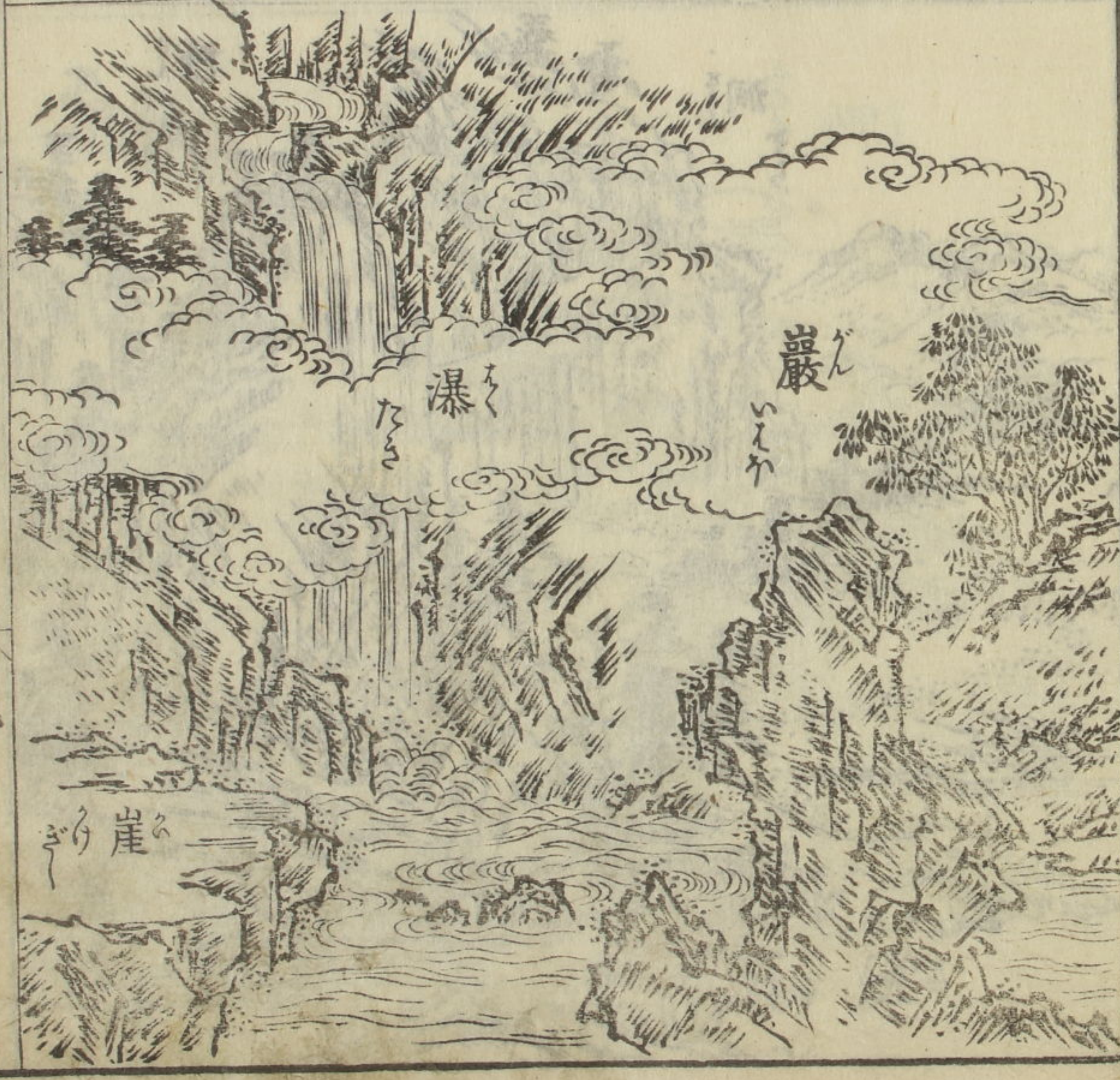
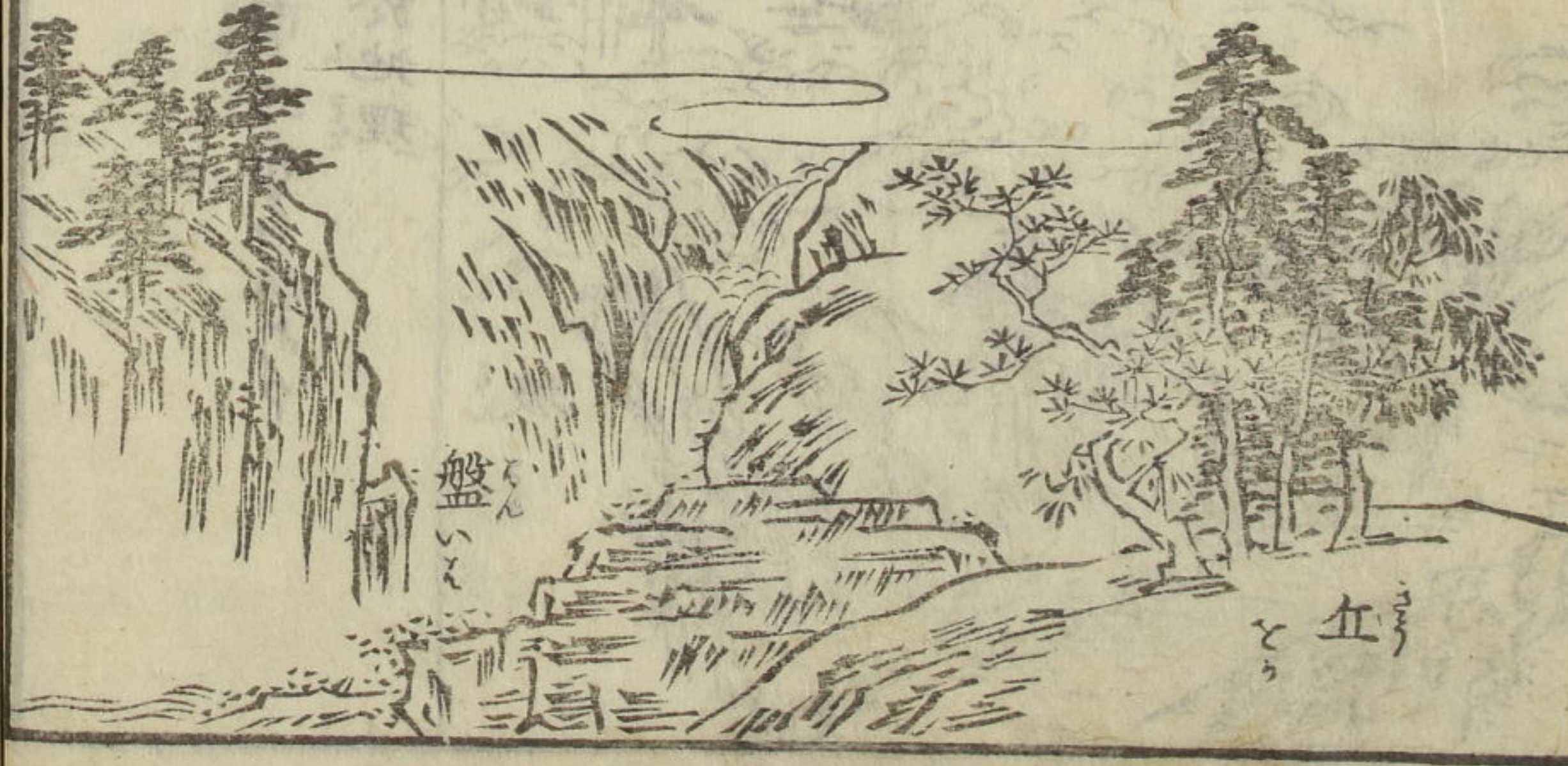
かつらと白くまて布と瀑

くからふしつて瀑布ともいふ

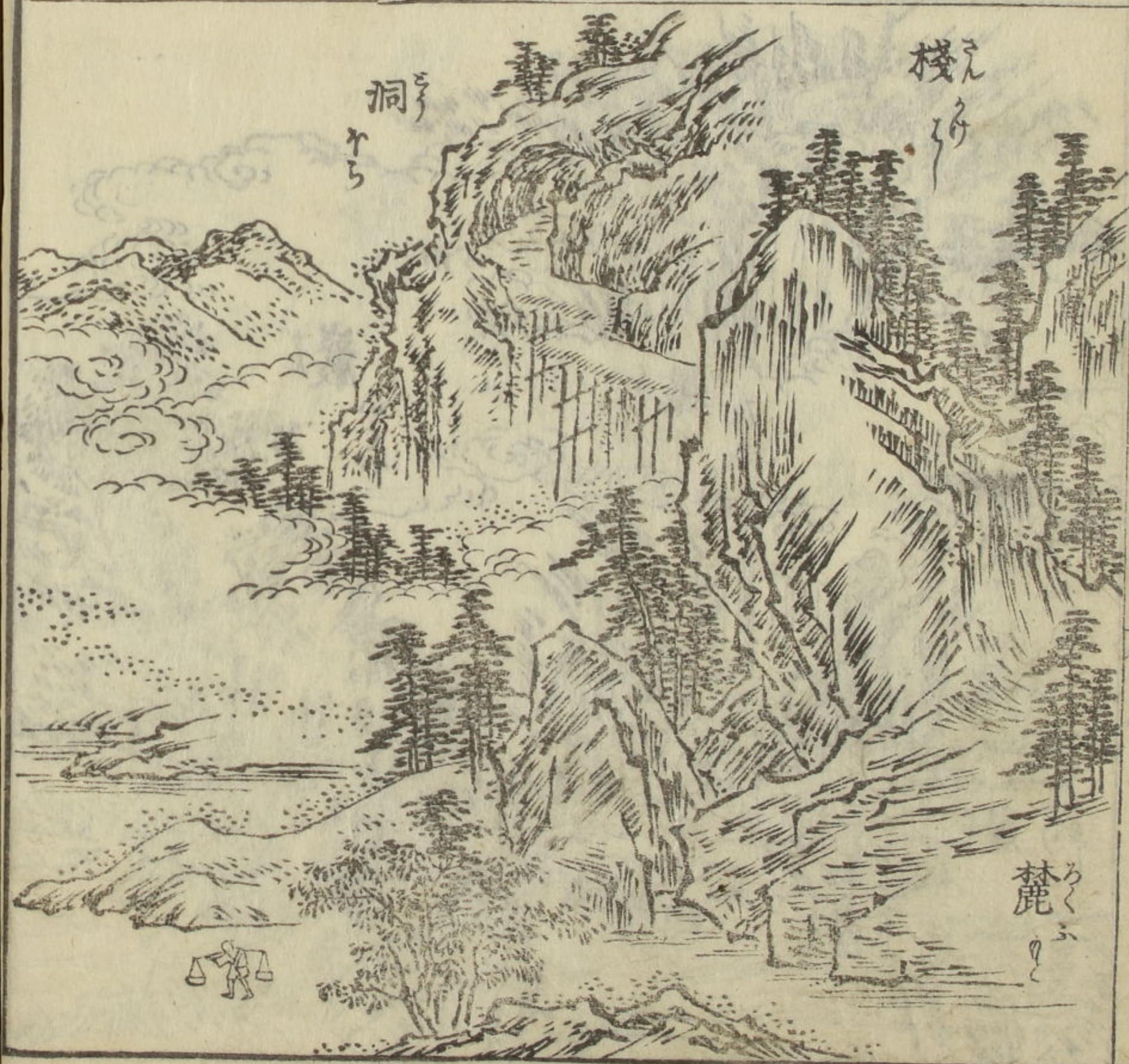
日本にも布列のあき

わをりんこし小の盧山

るはあわり又流は水



○ 棧の棚かり閣方を本谷閣  
 ちく道とあを瓜抜道とも閣  
 道ともいひんとの山坂補  
 道とて通るまじり木橋とてけ  
 道とていひしとていひ  
 ○ 洞は深通とて洞といひ  
 わをわりく道と通るあを  
 仙洞い仙人のとい洞より洞  
 山は岩穴わりて袖は似と  
 岫といひしとていひ  
 ○ 麓は山足かり林山より  
 と麓といひ麓鹿のありと  
 かりのい字鹿にんかり鹿  
 このい林といひかり  
 ○ 林は平地とて叢木のい林  
 といひ野外と林といひ樹林松林



棧

洞

麓

林といひ本のありとていひ  
 る瓜林といひ草のありとていひ  
 ると薄といひ薄といひ叢  
 ○ 岫へ山乃のいりり海  
 かりといひかりあふい  
 越前といひ金岫といひあふ  
 ○ 村は人のありりりわあ  
 村落といひ本へ村といひ字  
 通といひ史に村の字あり  
 邑といひ从い邑といひ別  
 といひ非かといひ今通  
 といひ  
 邑同  
 ○ 川の穿かり地と穿て  
 るのいりりて川といひ  
 河といひ書かりと補大  
 河といひ小かり瓜小川  
 といひ  
 かり補江といひかり

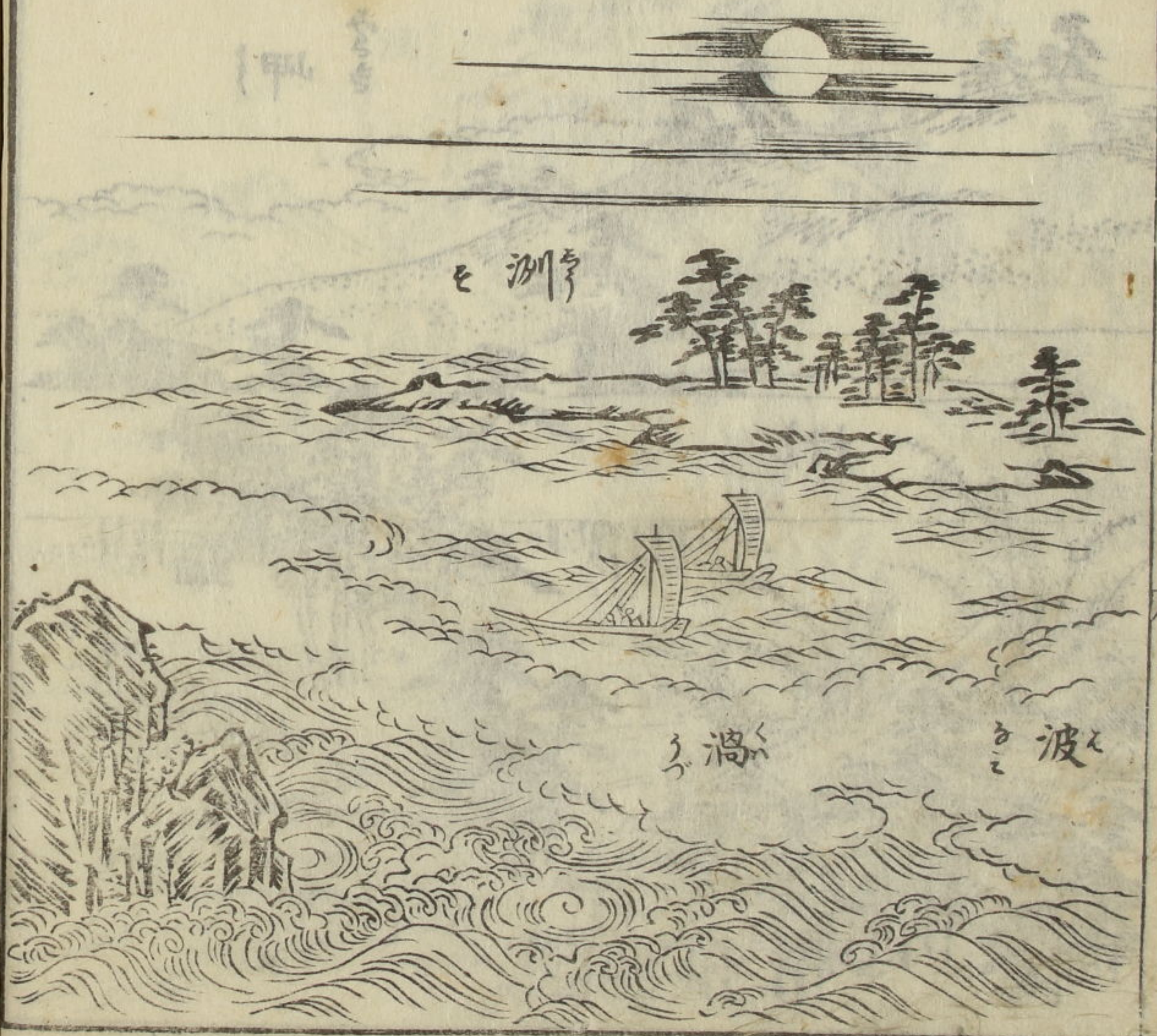


岫

村

林

○湖の水中の居る魚あり  
 人鳥などのあつたり息も  
 湖と渚とつなぐさき水  
 渚石のうら積りたるあり  
 水沙上にながりと瀬と入湍  
 同磯のつらあり  
 ○波の風水でうけて紋をかきと  
 波とつな水波の水紋なる浪瀬  
 といふ同一大波と濤といふ又  
 連いさ波なり又濤と潮頭と  
 つらあり  
 ○渦の水めぐる水めぐる  
 肥の字はなるとつらと泡瀬  
 沫のありあり  
 ○島の海中にふわりとるを  
 を島といふ陽鳴喚とつらと  
 同一蓬萊方丈瀟湘と海



中れ三島といふ  
 ○海は晦なり荒遠にして冥  
 昧多き意なり又海は穢なり  
 て其水黒して晦のそととも  
 たり湖は清なり潮はし  
 けあり  
 ○岸の水涯の高きあり  
 後ろにけきしたる浪もつら  
 とつと又岩の岬ねおにけり  
 ○瀆の水降あり涯はつら浦は  
 つらつらびと同一水降の平  
 沙と汀とつらつらつらあり  
 海濱のうらと瀉といふあり  
 河濱水濱海濱といふは也  
 ○田の土と耕の名口の田の四方  
 乃ち入る中十の字の田乃  
 降百とくみどのそつらあり



田畔

○畔の田の界ありたりとも又を  
あせともしひかり又睦隣同  
周の國ふり耕りの畔と讓と  
いふなり

○溝田間れ水より溝に構あり  
たてこふはぶくふへきなり  
渠同

○獨梁獨木梁ともいふなり  
又机橋ともいふ九木一木  
橋なりといふ

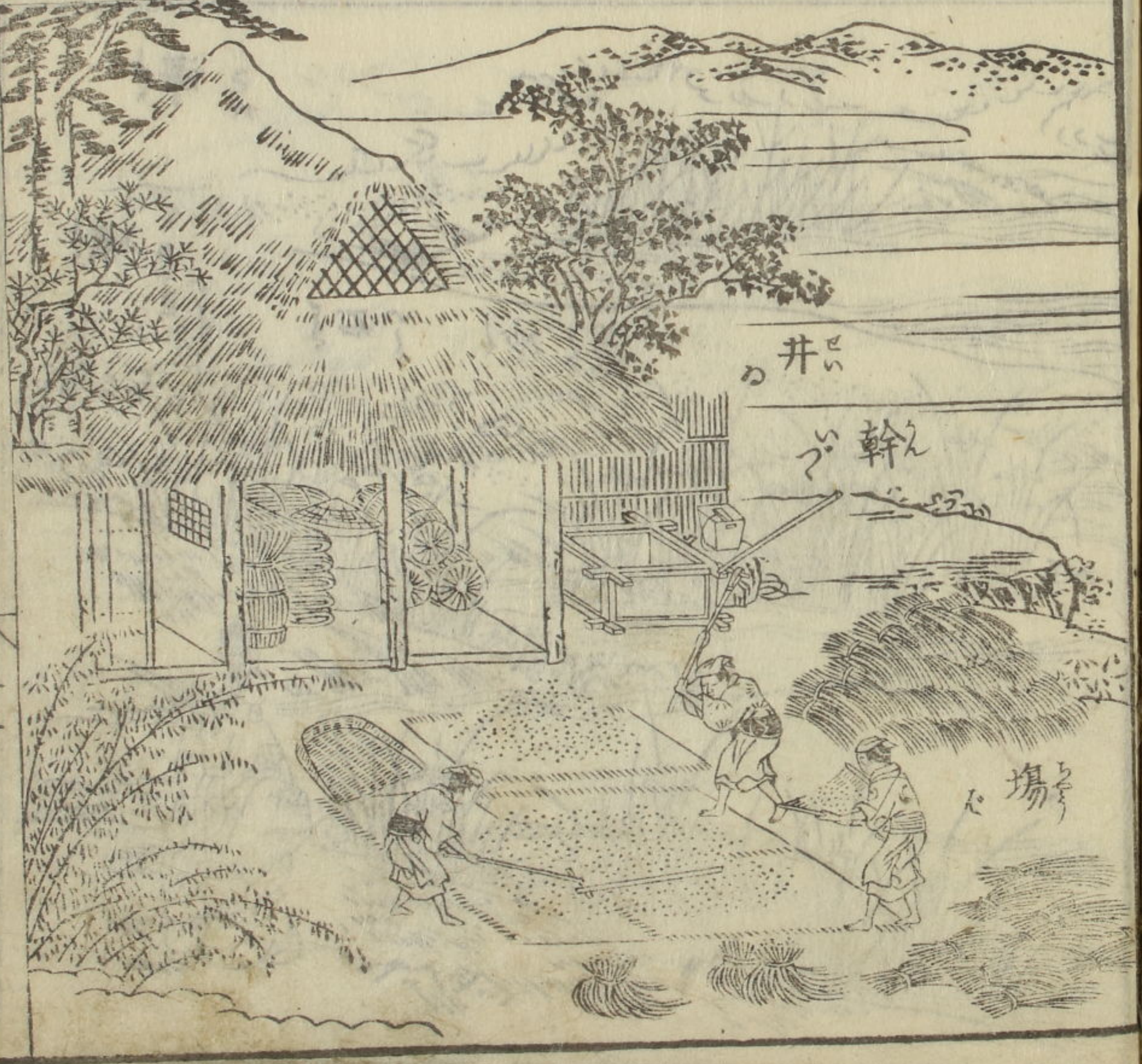
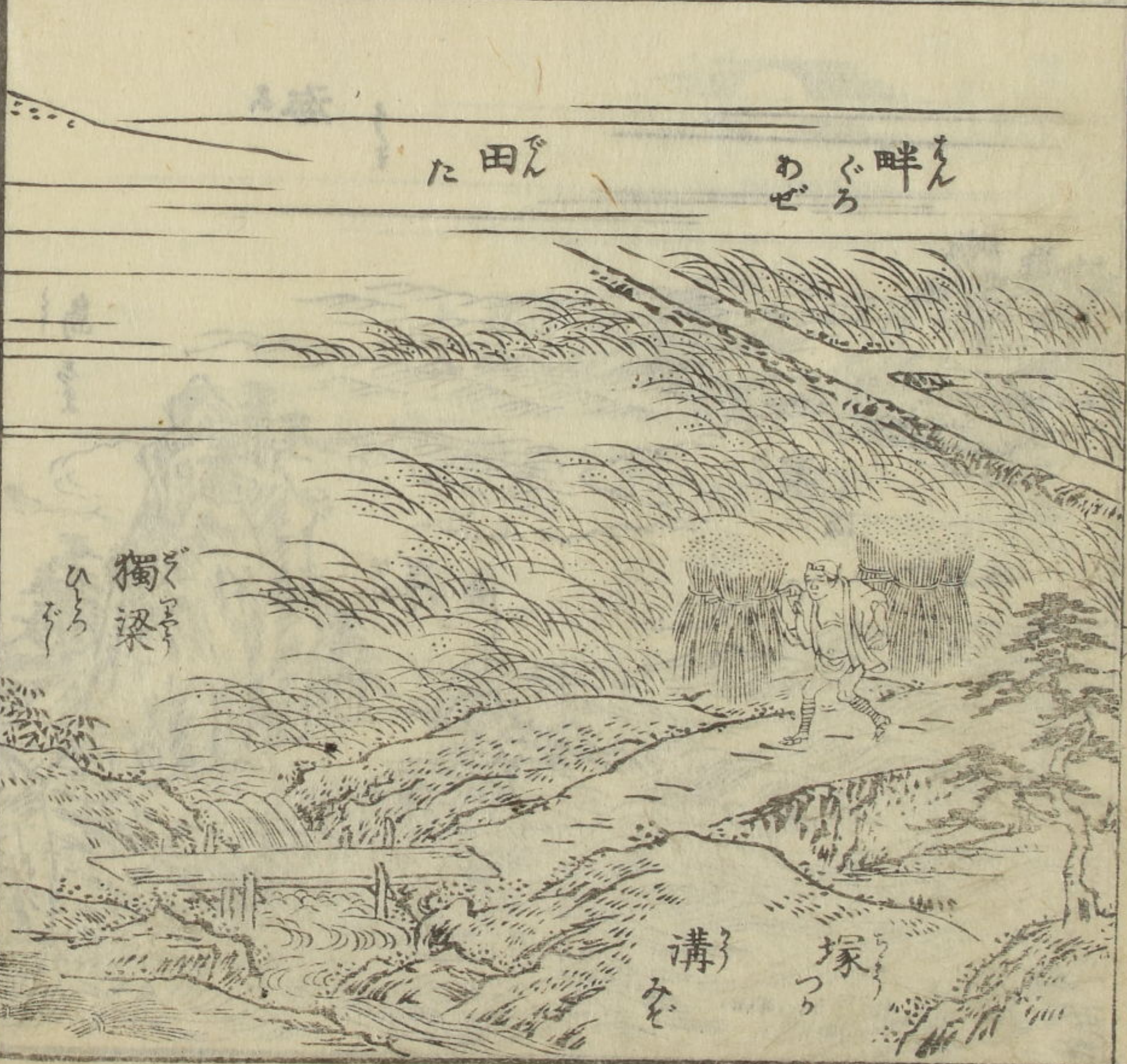
○塚の平なるは墓といひ土と  
封なるは塚といふ又とふまき  
高きと墳といふといふなり  
塚のうへよりいふは塚といふ  
事なり

○場五穀とちまひる圃なり

土と築は壇といふ地と除は  
場といふ神とまらるあかりと  
あり農人の米穀とこまを  
と場といふなりといふ  
市場賣場をといふ場とも  
いふなり

○井の伯益といふつくりし  
ゆりあり鳩と毒鳥あり羽井  
の口よりて人の水とのぬむ  
死をとりて井のりといふ桐を  
うの鳩と鳳凰と懼鳳凰は梧  
桐よりいひのぬむといふのぬ  
んといふ鳩は懼をいふなり  
○幹は井垣なりといふ俗に  
いけとあづといふ井筒と書  
いあり韓のうさうに竹は  
うさう鳳凰の竹の實をう

田 畔  
わ ぜ  
た 田



ふりの多き鳩とてとくくつりあり

○澤の水のわたりと聚るるかり澤に杜若河骨蕁さ

いやくん虫さびり其の夕暮

の景色もかりり

○石の山青かり塊とて

石とて石とて金銀銅鉄

と生じ星かり石とて生じ

石に怪わり石より生じ

○礫の小石かりとて

みつびてとて心かりその石

礫にかりとて璃龍の蟠

る瓜かりとて

○沙の細散の石かり

いのかかりか説文の水少ふ

ちと水かりとて沙わり

の義あり織沙のほかり

ほかりとて同訓あり

○池の地とて水と溜る

をり沼も同く四角なる

池と方池と

○泉の源水かりとて

出り温泉とて垂つる

沃泉とて元とて

泉とて病と治る温泉

とてゆかり地とて黄泉

とて

○塘の池塘かり池のかり

乃つて俗とていけと

り柳とてり柳塘

とて柳塘莫々暗啼鴉と

詩小もほかり

○園の果とてり鳥



頁書増補言夢圖彙

けごりの瓜やしんが瓜瓜苑  
とつひ垣あつ瓜園とらふら  
まもそのと訓を圃園今俗  
にうせをみるしん

圃園茶とうゆの瓜瓜の  
又果瓜とうゆと圃園とつを  
もつてふんさけけり我不  
知老圃と孔子ものふるや  
論語ふ見へる

問へ里門あり今つ在所  
の惣門あり又家二十五軒  
つとる在所と問とつ問  
巻とつ

郊外と野とつあり野の  
ひらくして平あり瓜つ  
高くして平ありと原と  
こま瓜ありと野原とつ

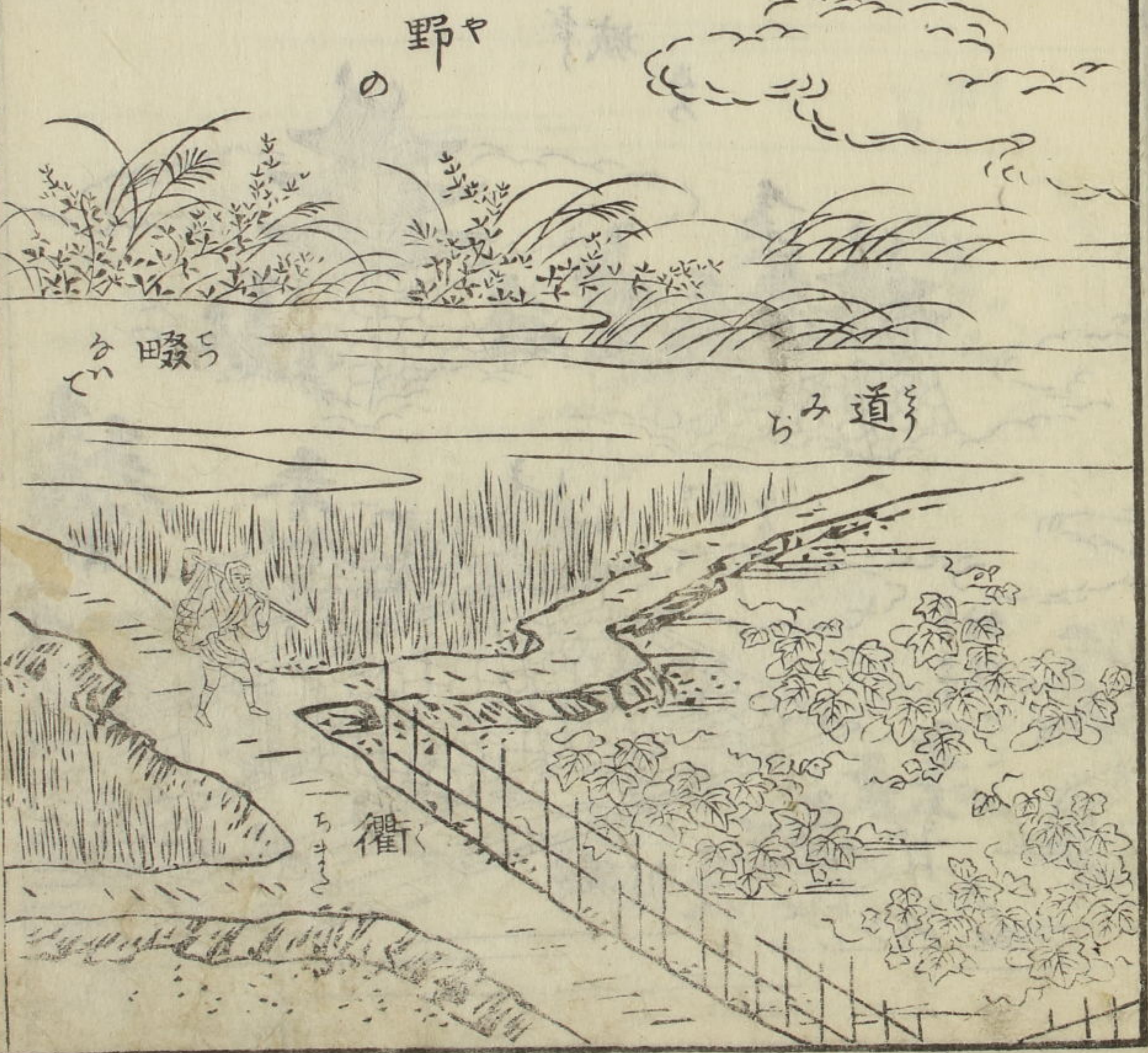
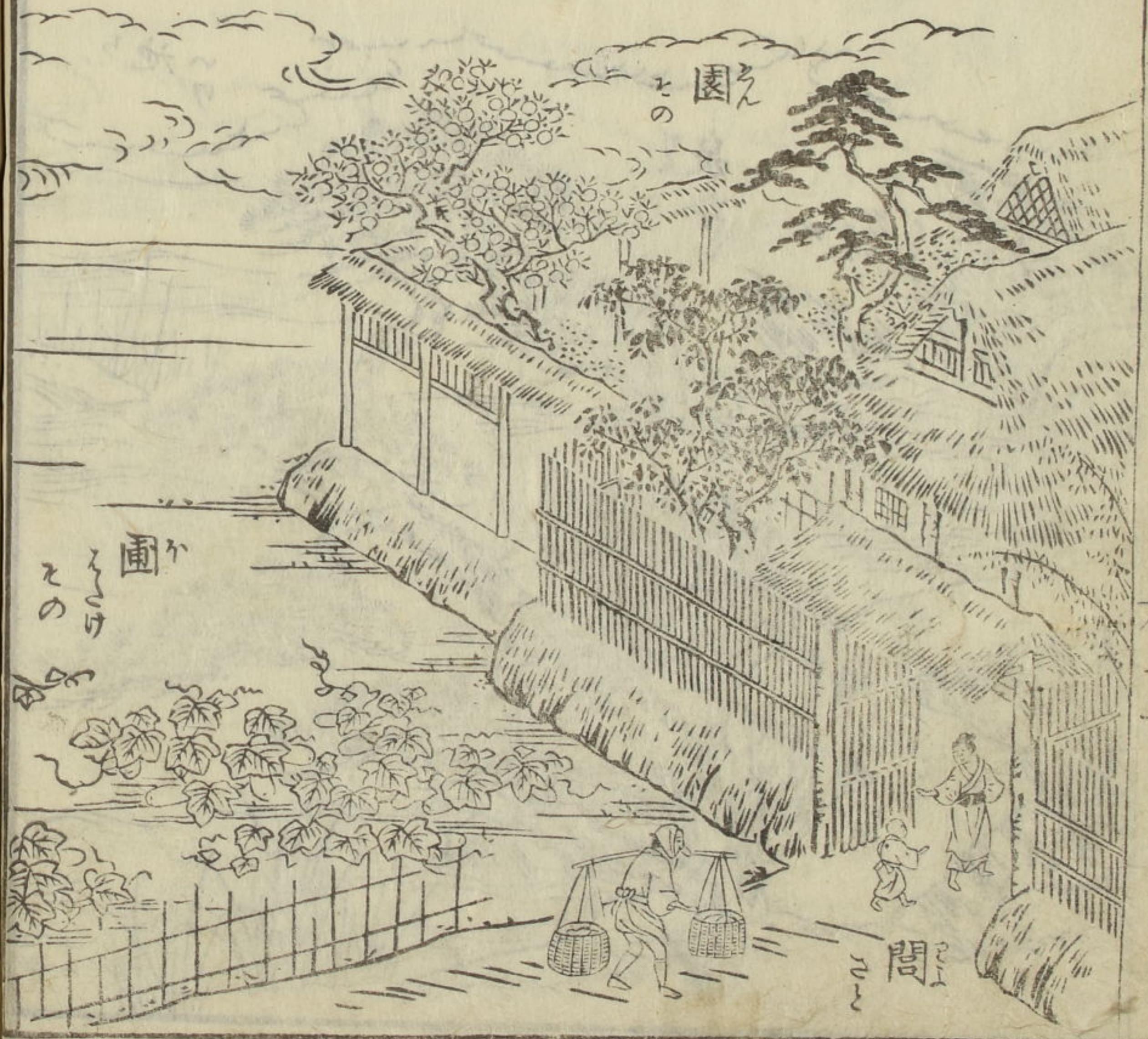
埜同一野と書いあやまり  
○道の道路なりと途同一  
徑のこみらあり

用明天皇のとき五畿七道ふ  
ころろ文武天皇のとき十六  
箇國とつ

○畷の田の間のみとありあり  
てあり俗ふ繩手と書繩を  
引つらつと直けきあり

○衛の四達の道ありとつ  
十字街とつありとあり俗  
に辻の家紙書てつとと讀  
街衛洞達とあり

○城の黄帝はつありとつを  
つありとつとつとつとつ  
けつありとつとつとつとつ  
つ外と郭とつとつ天守狭間



多門 武者屯櫓 大走 虎魚

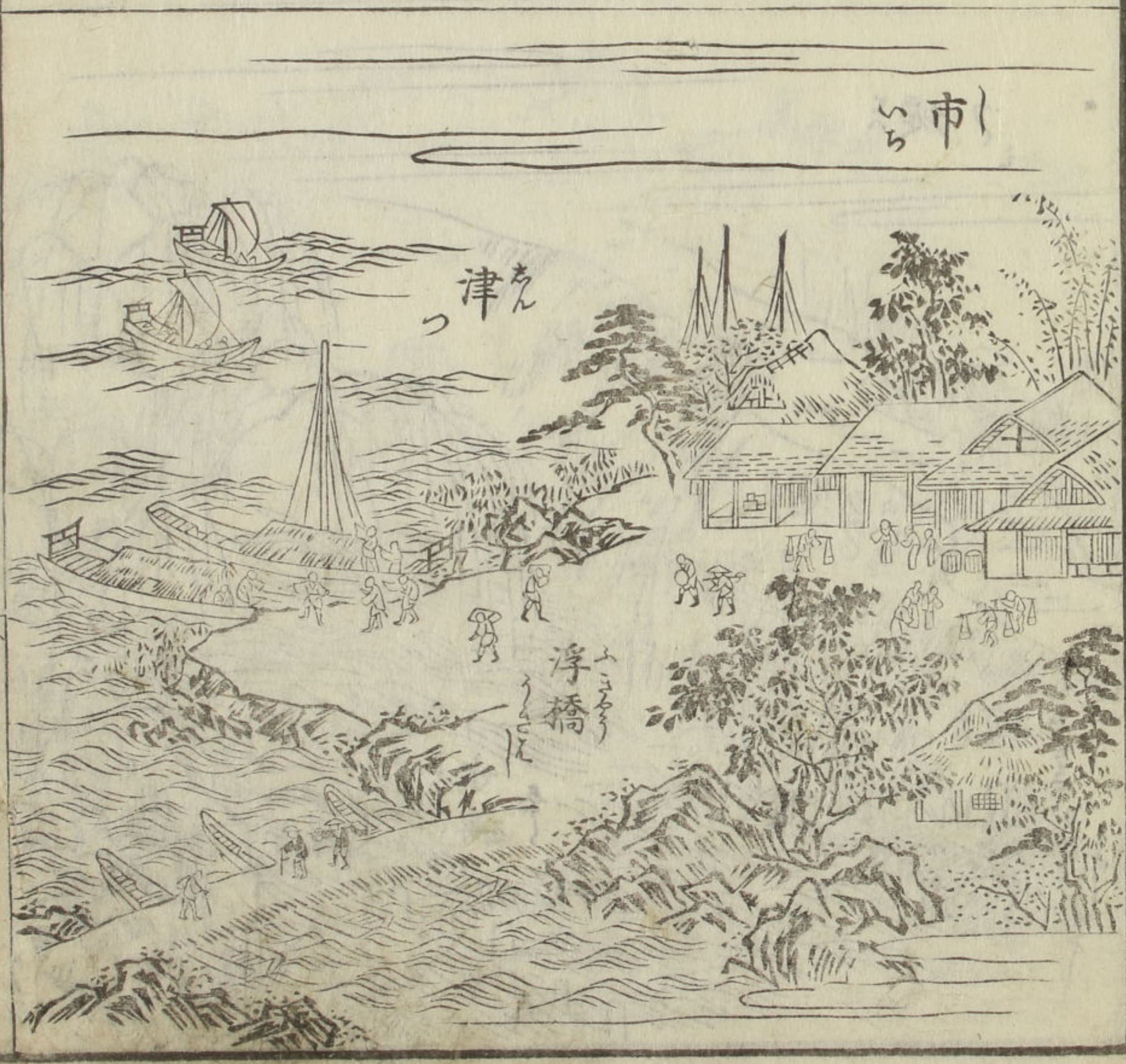
○塹城とゆる水あり又坑塹なる坑壕あり比同城郭のわりなり

○封疆のまに封して疆をかきりけり俗にまにまにとて洛陽より大岡秀吉公のとき東西南北に封疆とて作てしなり今にあり

○橋のりあり一禹王の聖人つるともとあり梁も書あり石のりあり板橋のりあり石橋のりあり土橋のりあり歩橋のりあり



又祝融のりあり火のりあり賣買の所と市とあり補今俗に魚店とあり魚のりあり呉服のりあり

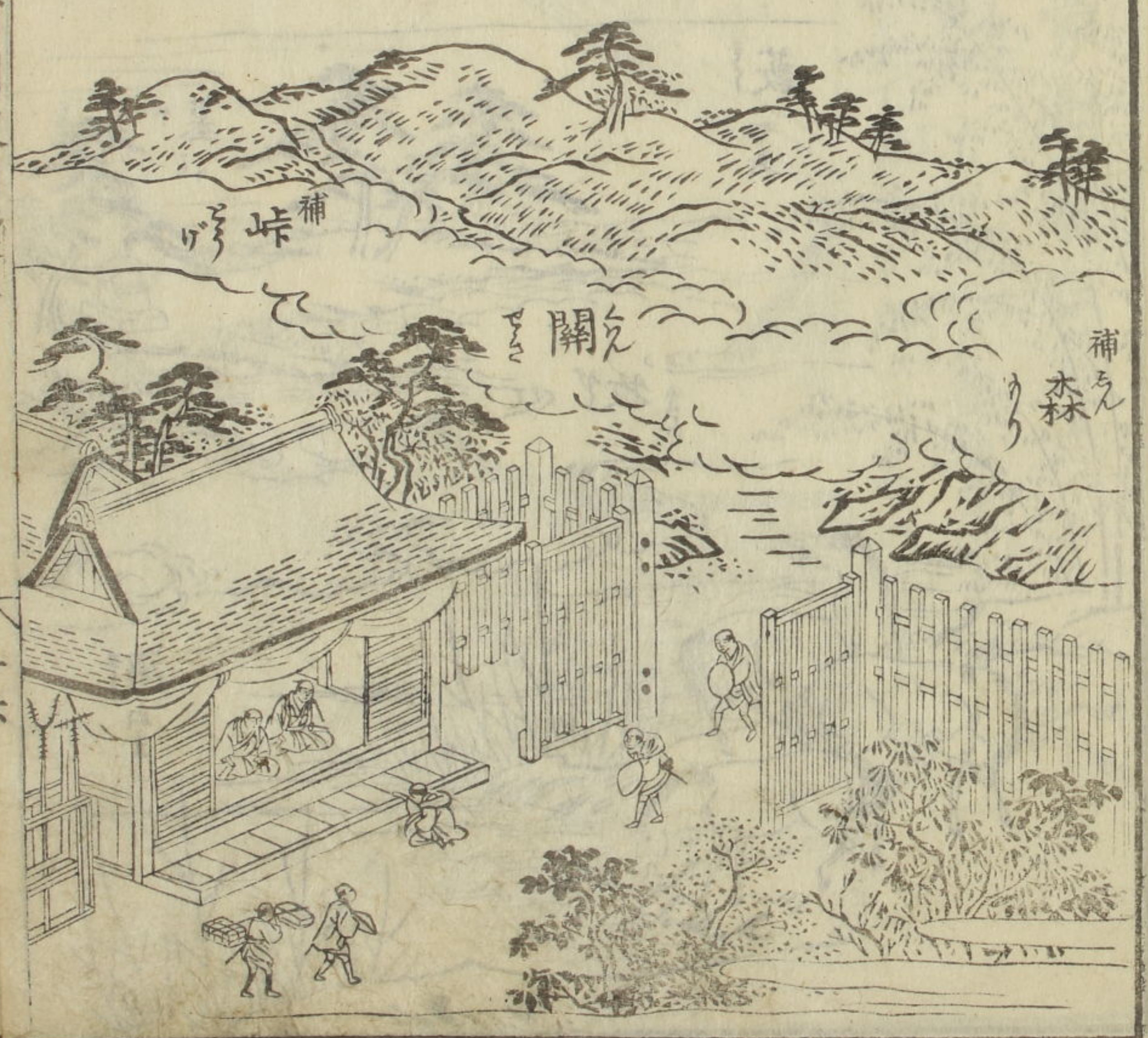




柳堤の補堤は柳と植るものと云  
 ○開の水門は俗にさか火  
 極の口といふ田に水を入るるに  
 引のけいふるはあつと  
 ○堰の蛇籠は石とて水と  
 ぶくくあり又埭とも書也  
 水邊に田地の屋敷のまは堰  
 をとるあり補堤は土砂とて水  
 ぶくくともをけかり  
 ○水柵は竹木とてさか火と  
 くら水けかりとてさか火  
 土川は風乃くけかりとてさか火  
 かりんものぬりからぬかり  
 ともろかりとてさか火とてさか火  
 水柵あり  
 ○開はゆきとてさか火とてさか火  
 きんととてさか火とてさか火



風破の関 鈴鹿関 逢坂関  
 あまのこ 天の三関といふ今  
 多しとて 箱根の関といふ  
 ありとて 其外関所あり  
 補堤は山坂とのかりありとて  
 つてさか火のぬりからぬかり  
 の峠 鈴鹿の峠なりとて山道の  
 往來ふとてさか火とてさか火  
 かりとて  
 補堤は木の多く生えあつと  
 る所といふ松の森堂なりとて  
 又鷲の森なりといふあり  
 ○牧は六畜とてやかりあり  
 つて又郊外とて牧といふ言ひ  
 畜養なりから牧とてさか火  
 関の守護とて牧といふも  
 ともろかりの義にとも



貞享四年補堤関図

○墓の草茶の字れ意めて  
 ちてつとりの事あり子孫の  
 先祖と思慕をもち塚も  
 同一天子のそく陵といふ  
 整同一壙つるをみる  
 沼の池のたかりのあり  
 又水かく泥土ありのあり池  
 澤沼の同トをさひなをふ  
 城國伏見に大沼あり葦草  
 など多く入水鳥の住所也  
 圃敷の竹林あり苦竹淡竹の  
 二種を用ひて其性くまうく  
 竹敷といひて造作の器財を用  
 ゆる幸をみる

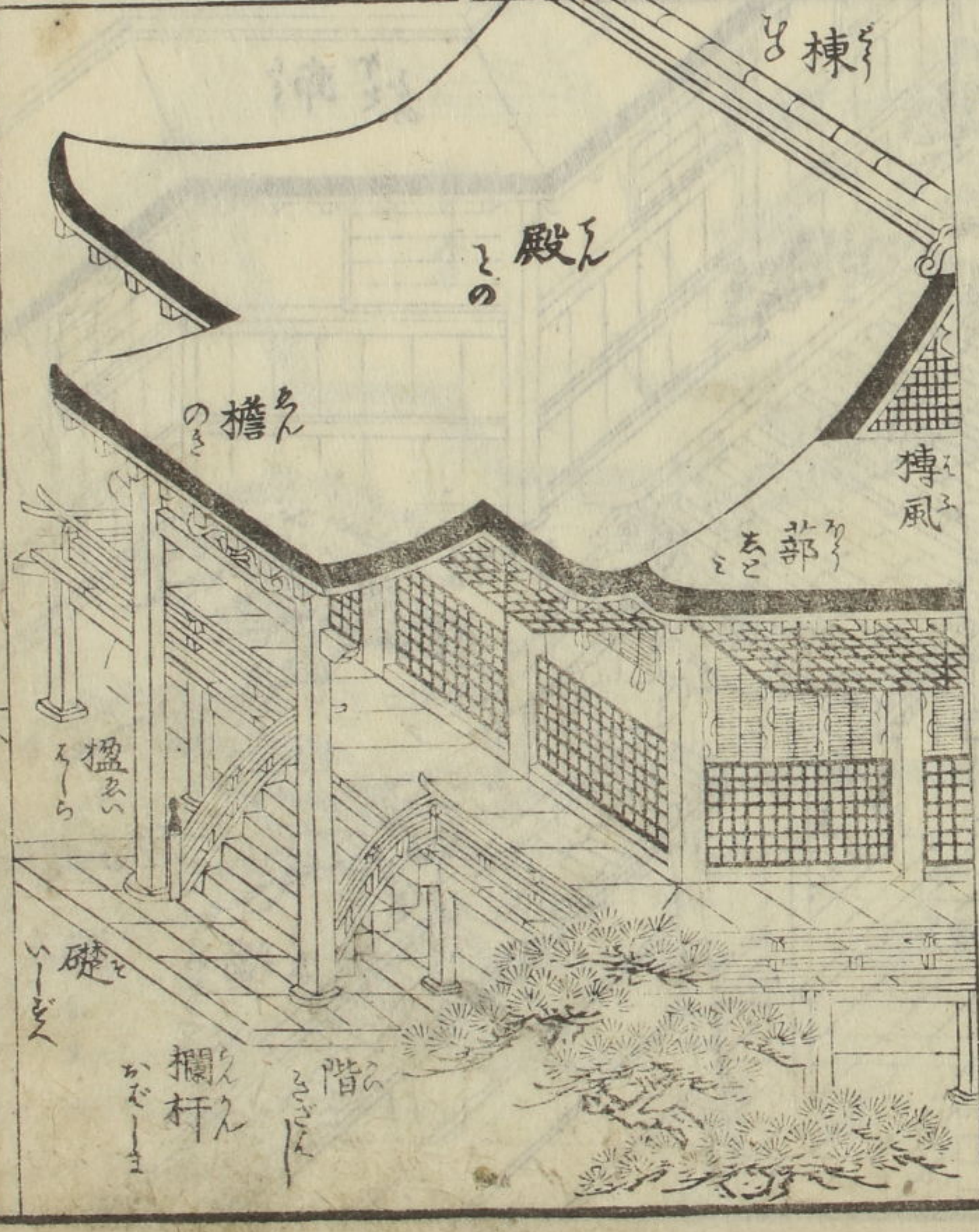


頭書增補訓蒙圖彙卷之三

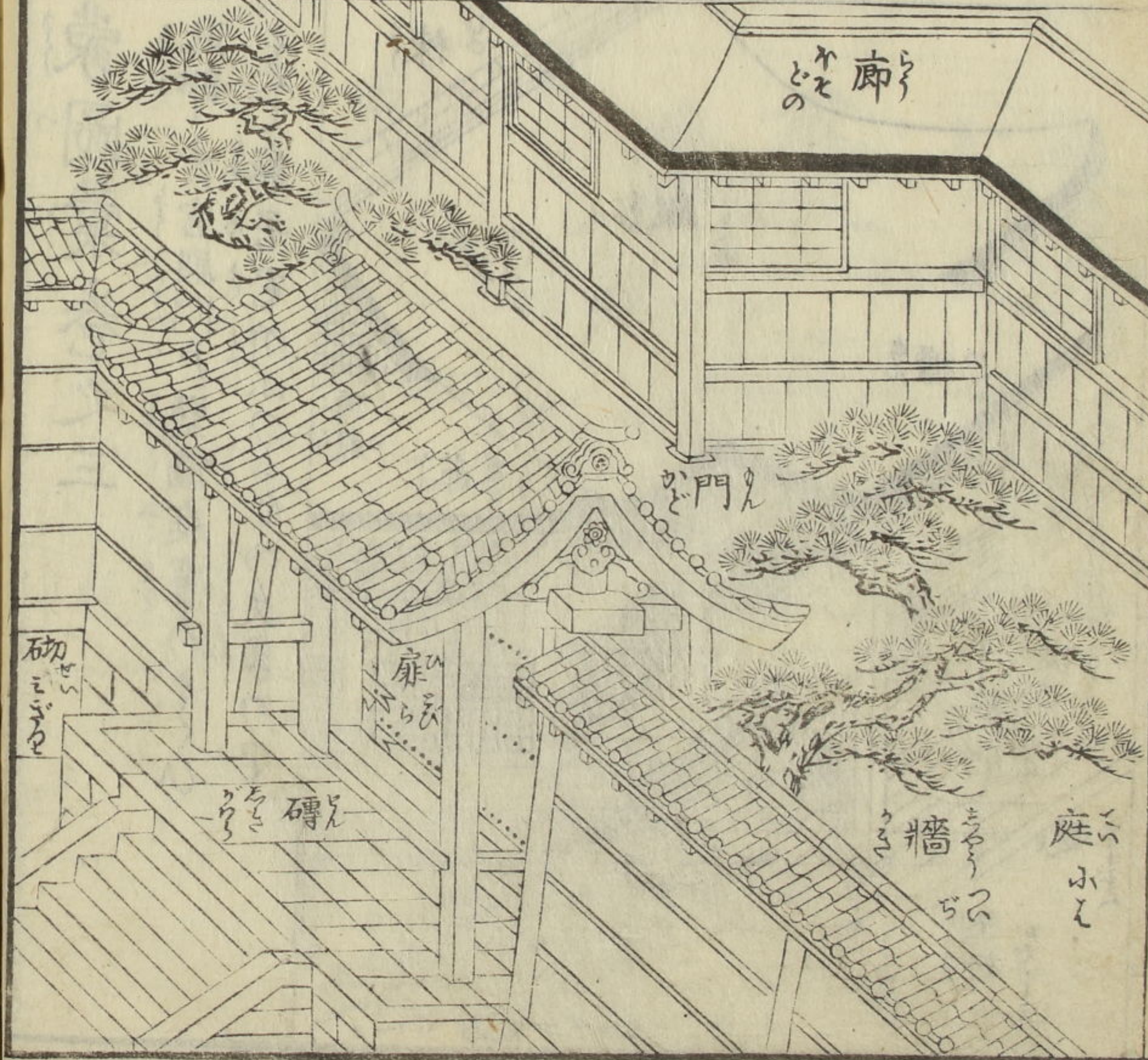
居處

此部小宮殿門戸壁牆庭窓乃をぐひ  
 として家居宅所ふつとての文字あり

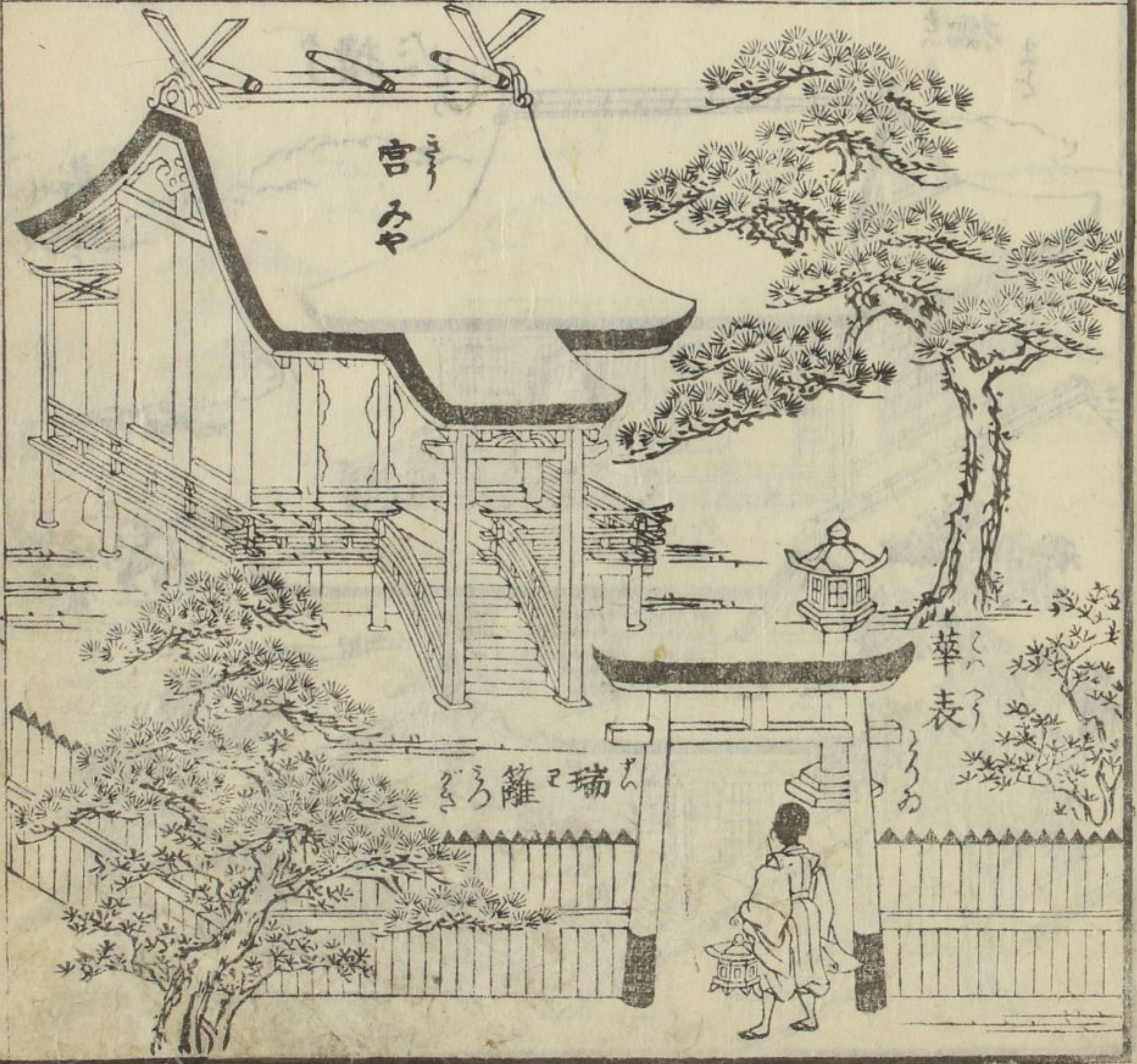
○殿の堂の高くして大なる  
 そのあり天子の居あり西殿  
 といふ殿乃天井に藻とをくら  
 藻に水草かき火災とく  
 る乃くくあり  
 ○棟の屋極から屋脊と堯  
 といふいらくあり鳩尾いらく  
 虫吻いらくあり  
 ○檐の簷宇同一遠檐點  
 滴如琴筑と詩ふもはくまうり  
 又檐のわやめ檐の水をく  
 飲ふよりのなり



○楹殿門の上方にのこり  
て五楹とつ柱同一短柱と  
つらむらかな  
○欄杆の階除の木句欄あり  
闌干とも書なり干又檻作  
るかむゆあり直欄横杆  
○階の砌より堂に昇る道は  
階級階除階様とも俗  
にささくとも階少つら  
あやまりあり  
○博風風板搏ともいふ  
とささくの名なり回先と  
懸裏とも裏の水はぼとの  
かまびた美とささくの  
○部屋の檐ふつりあげ  
てえぬかともありのま  
俗ふうへともいふつとく



草にもやり戸の部の同  
まもあつとつり部  
あつらあり  
○礎柱の下れる多詩と  
化つ韻字かふいと礎と  
礫礫并に同一  
○庭門屏の内庭と  
又砌といへも庭あり  
○門の西戸あり瓜門と  
楣闔張ともあり  
○廊殿下の外屋なりと  
わりともいふは廊下廻  
廊かともあり奉殿あり  
ひさしなり  
○牆の垣垣壙並同又門  
屏と蕭牆とも蕭が言  
肅多り君臣のあひまるとり



乃此門屏にりて肅  
敬とくつちあり

○扉木して作るを扉と  
竹とつるを扇とて門扉  
戸扉柴扉竹扉かといふ

○磚は石にりて又甌  
甄ともいふ壁磚ともいふ  
埴甄並同禪堂なほ有

○砌階甃ありて俗  
にりては通して庭を  
事かき

○宮の唐中へ至尊の居取  
と宮といふ和朝中へ神の  
居とていふ宮といふ又社

とも祠ともいふあり

○華表の神前とて鳥  
井かきとていふ事い神

門からともいふ又天のまはれと  
ちかひともいふ鳥井と名づる  
幸火災とていふものなり乃  
名かき

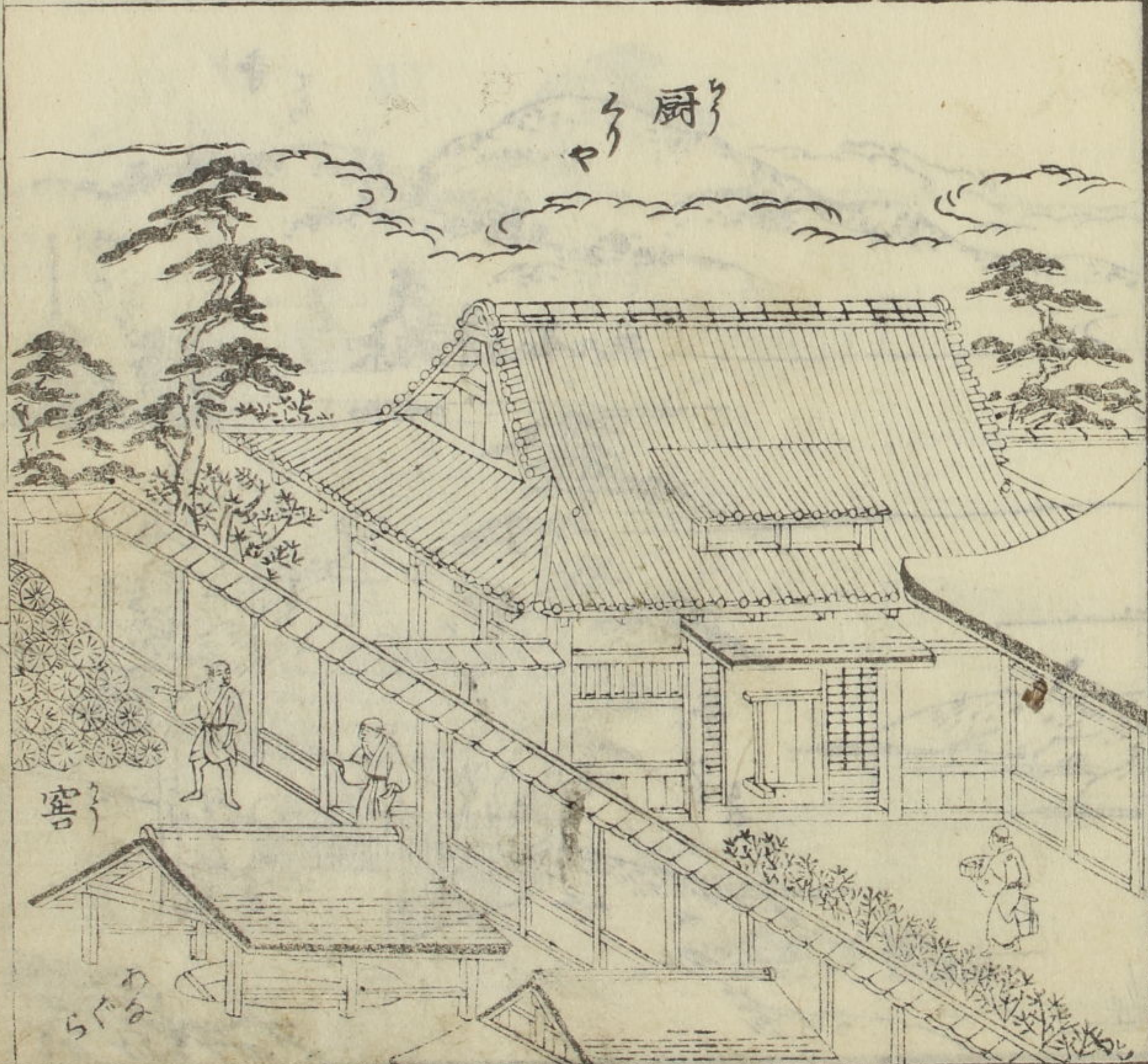
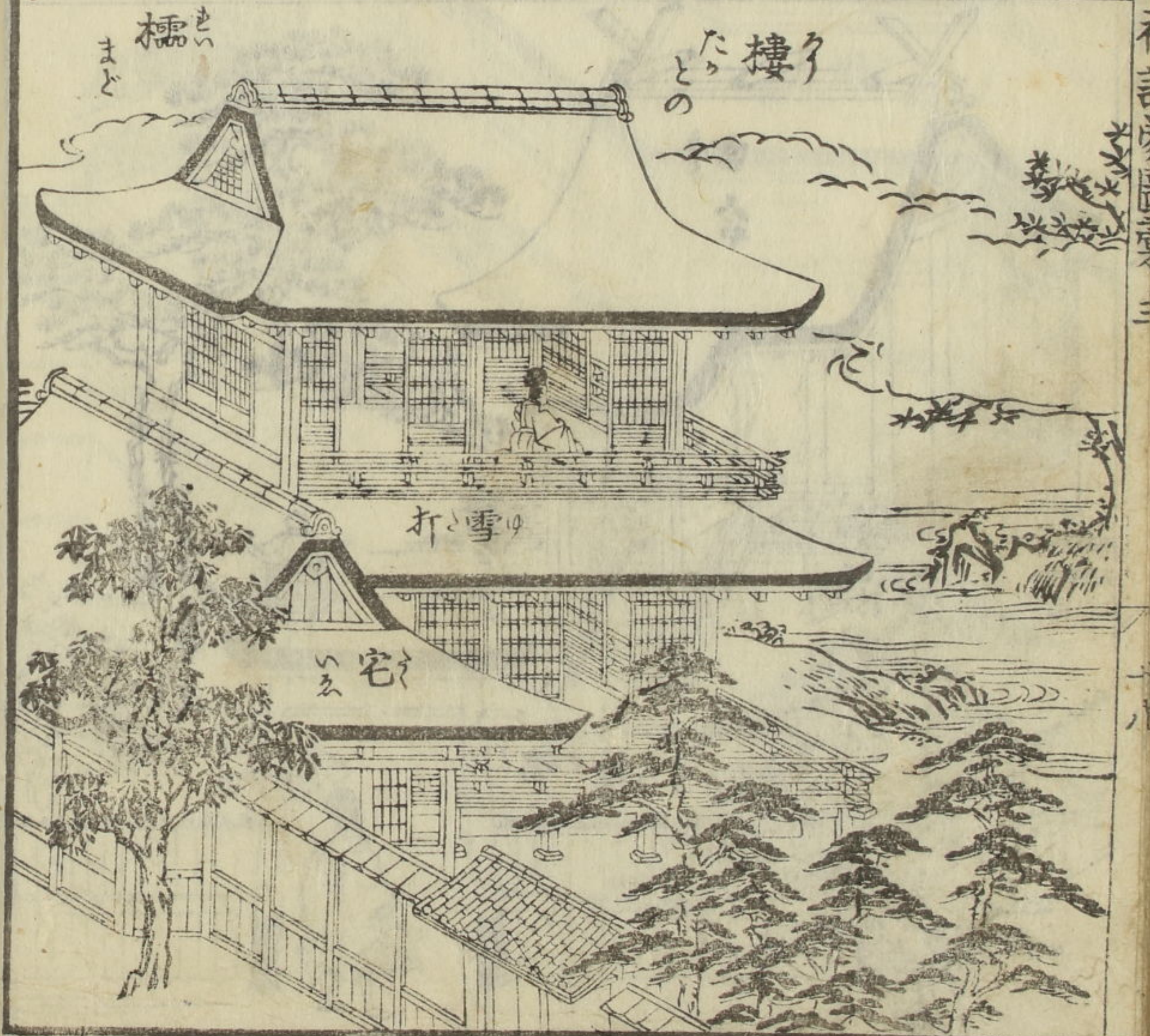
○瑞籬の神前社前のこと  
玉垣ともいふ不浄の人あき  
よるにへんこと

○樓の重屋なり高くのさひ  
よて物見ともいふ今俗  
にちんといふ

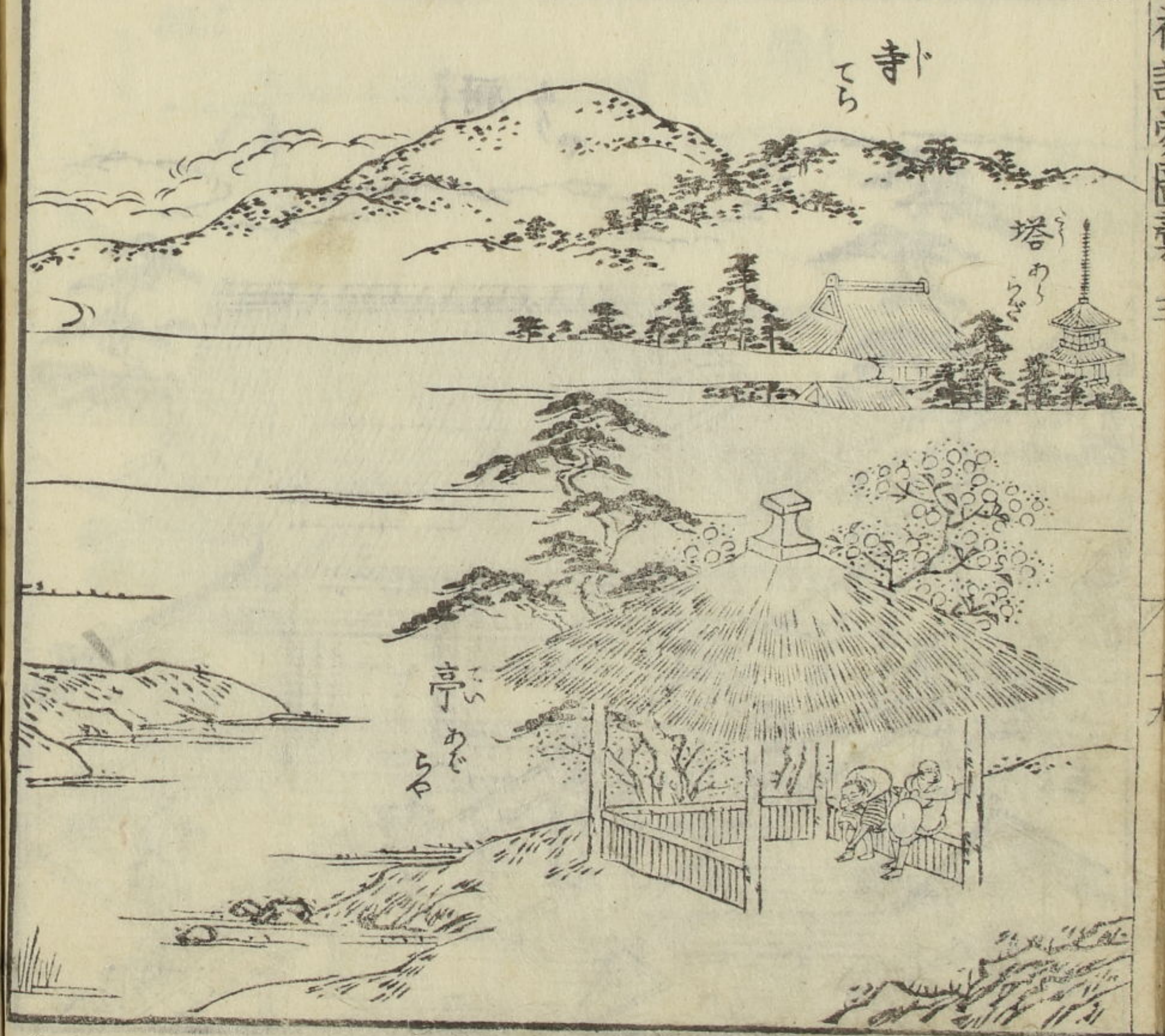
○櫓の扁子なり櫓子あり俗  
にりていふものなり櫓子  
といふものなり土蔵といふ

○雪打の佛殿樓閣又二階  
なほいふものなり雨雪かどの  
打のりていふものなり俗  
にのまといふあり

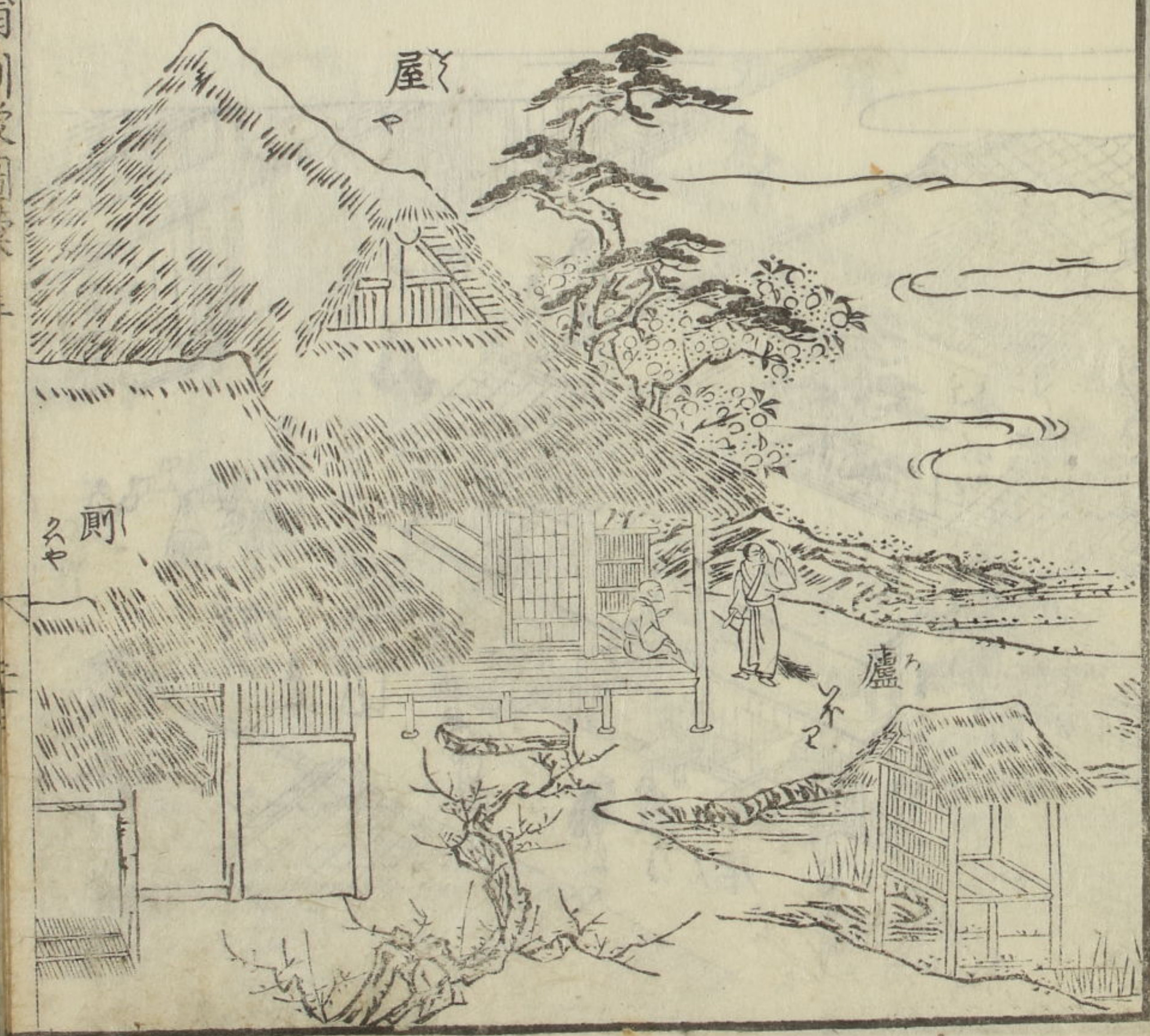
にのまといふあり



○密の擇多りよき所は擇  
ていふをさつるゆかり又  
人の説をる所といふ義もあ  
る舎家屋よりふ同又の第宅  
○厨の幸い飽をる所ありふ  
料理あり又庖厨といふ略  
あつくさるる所の圃俗名付て  
屋ありといふなり  
○害の地蔵あり九と實と云  
方ありの害といふ所のふあり  
くらあり地とやうく穴とに  
らへ家財と入る所あり  
○寺のりし官人の居る所  
多あり天竺より佛經と白  
馬ふりかせく鴻臚寺といふ  
官人の居る所ありしより佛氏  
の居る所の名と

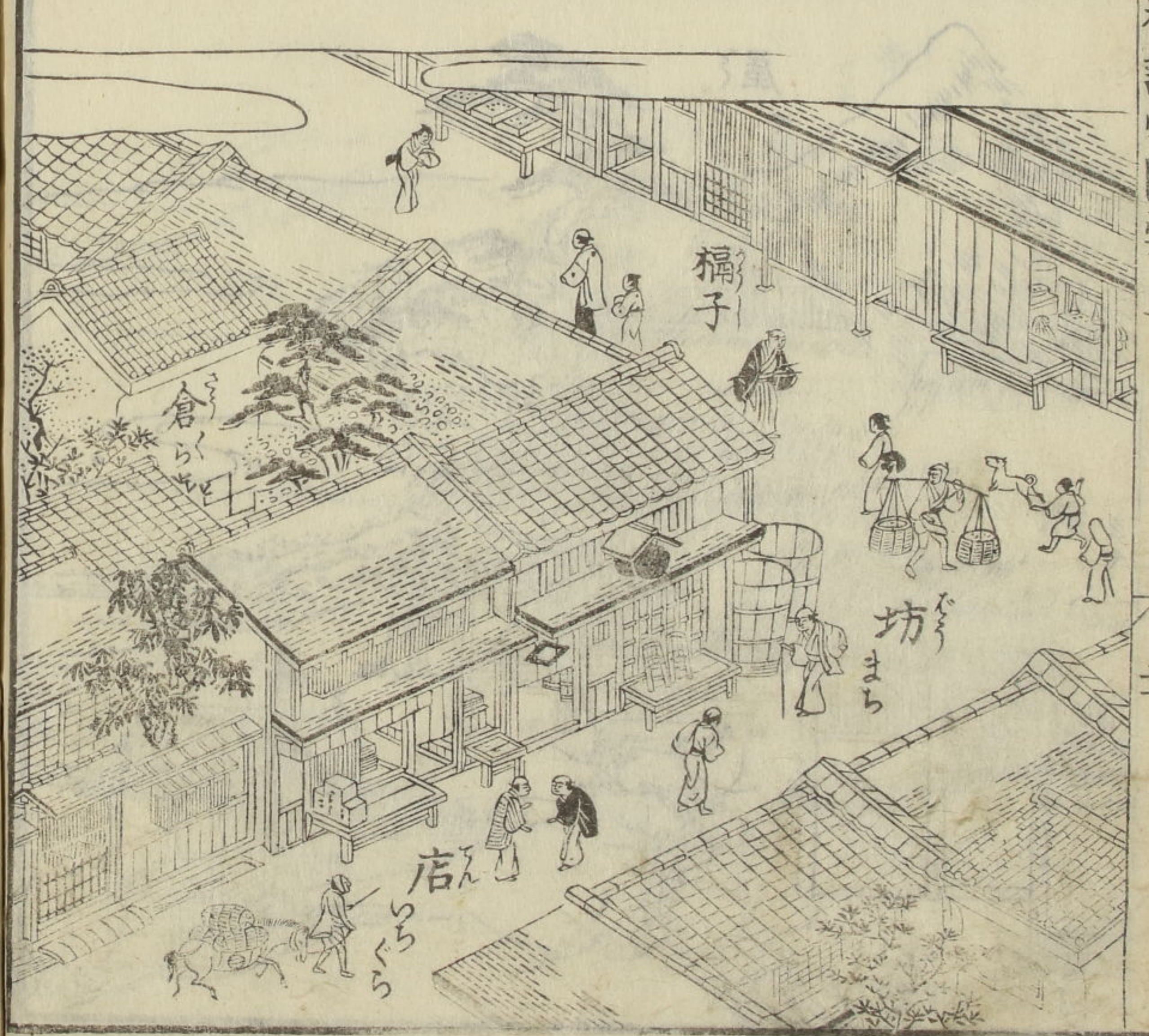


○塔のりし所の長安ふ慈  
恩寺といふ寺あり塔あり鴈  
塔といふ進士名とこの下に  
題と塔婆 浮圖同ト  
○亭の道路の舎あり赤  
行旅宿會の館とありかり  
ともとり俗いひとどりま  
んごやあり高く辛る樓  
をも亭といふ  
○屋の舎あり大屋と度屋と  
いふもさるる所の家の真中  
母屋といふ四面の家と四阿  
屋といふ俗小屋とやほといふ  
○廬の田の中れ屋あり稲を  
かき入る所あり草ゆくまの  
とふたより屋といふ巷同  
かりかの廬のといふ廬の字

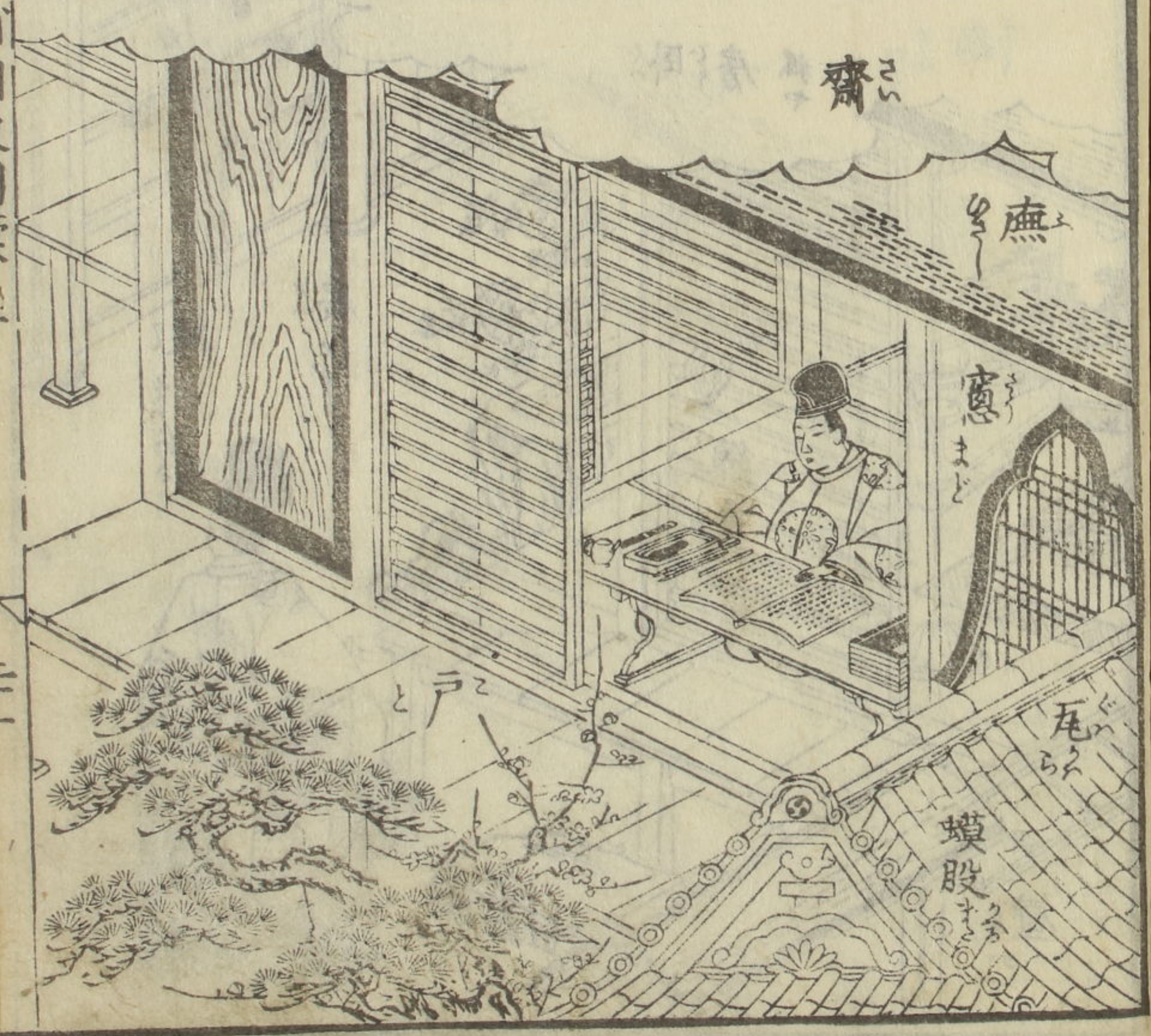


と書きり  
 ○廁の圓かり濁り俗こと  
 と雪浪といふ古の清といふ不  
 潔と清除といふくの名あり  
 釋名小雅なる人あつて人に  
 雜廁（まじり）とあり

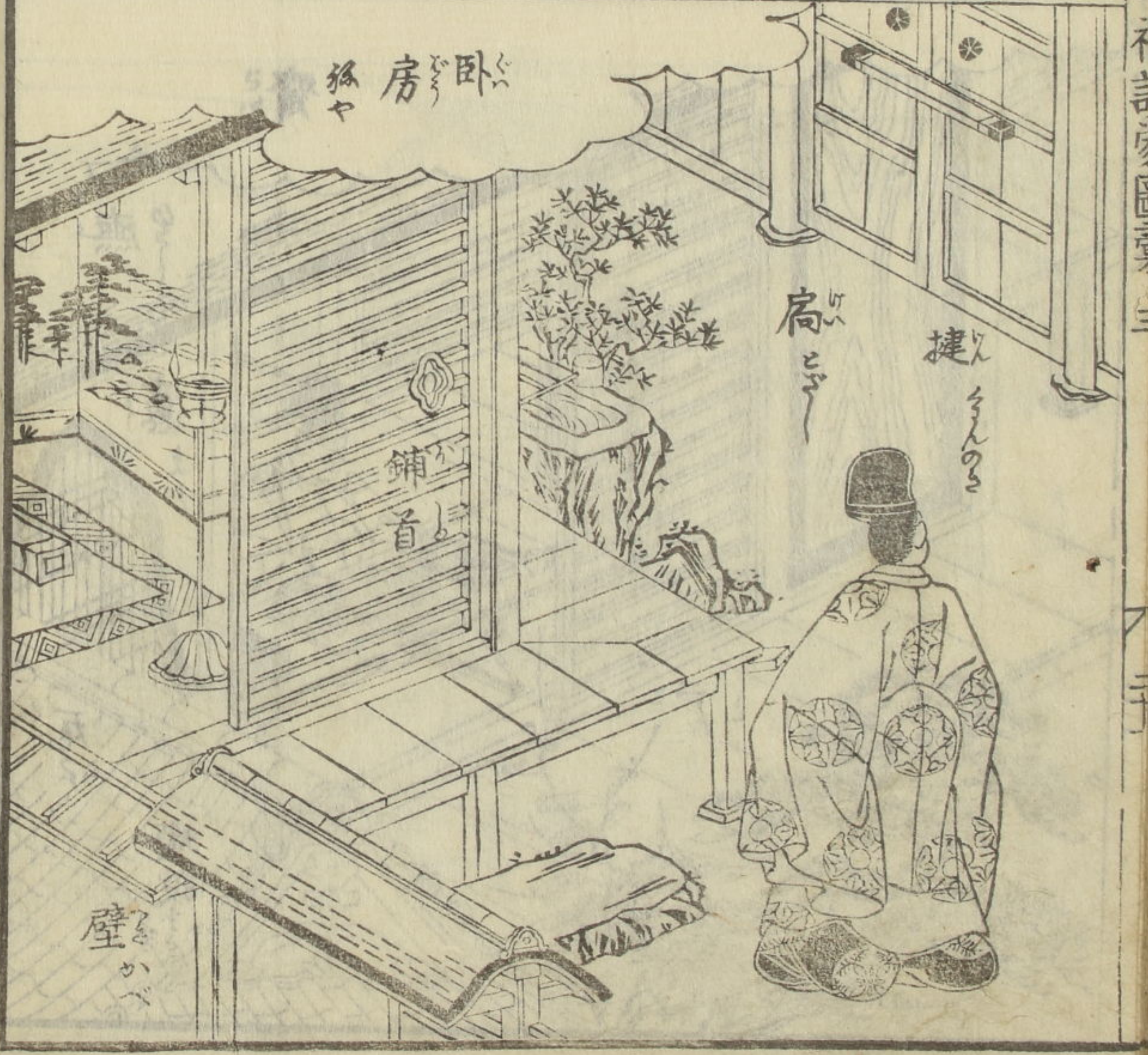
○坊の邑里の名らむあり  
 町あり京二条通と銅駝坊と  
 つまらぬ二の別屋と坊と  
 つまらぬ僧坊寺坊とあり  
 ○店の物としらむありなる  
 かな茶店酒店などつなを  
 店屋物などもつて肆塵  
 鋪（か）といふあり  
 ○桶子の格子とも書かり組  
 入桶子狐桶子釣桶子臺桶  
 子などあり林裏（はやし）の寺社を



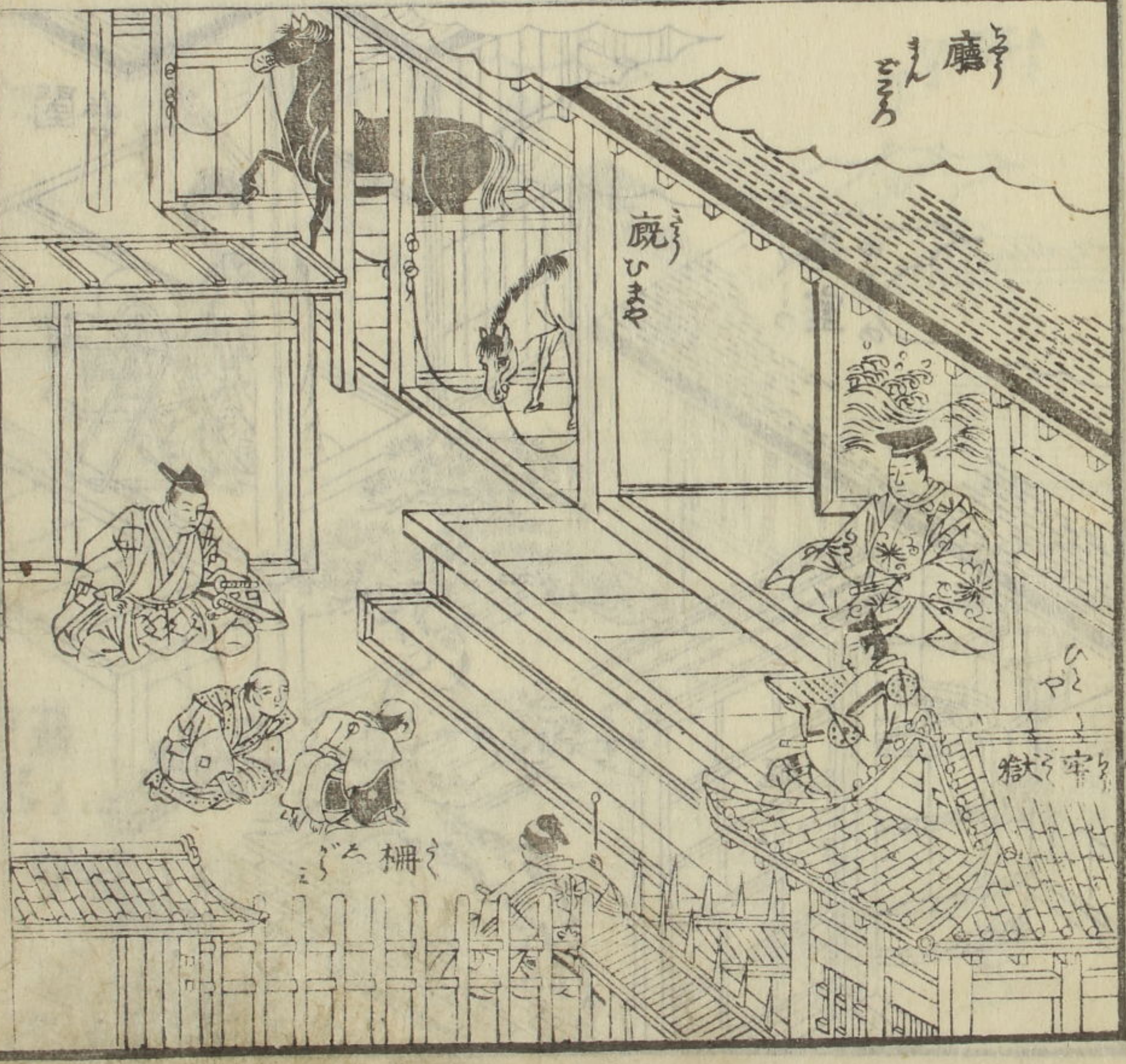
にのり狐桶子（うしづ）なり  
 ○倉の五穀と入る倉といふ  
 米と入る倉といふ財宝を  
 つまらぬ藏といふ書物と入る  
 庫といふ上庫といふるあり  
 府もつあり  
 ○齋の潔まり心と洗と齋と  
 つて学文所といふ又燕居の室  
 かな学文ととも人齋考（さいこう）  
 付といふ我学文所の号とつて  
 あり  
 ○廡の堂下の周廊あり大屋  
 の四邊乃重檐あり  
 ○窓の釋名に窓の聴かな  
 内より外とつてありてあり  
 聴とかなとの義あり牕牖並  
 に同一紙窓紗窓



○戸の一枚ぎのうの門と戸  
とつゝ又四と戸とつひ外と門  
とつゝとつゝ民家かへび  
はく多々編戸とつゝ  
○尾の唐夏の昆吾とつゝつ  
くろろ一かりつゝとつゝ  
おろろ狐胆とつゝ又魏の文帝  
尾とつゝ鴛鴦とつゝとつゝ  
見みやとつゝ故事のりつゝ  
鴛鴦尾とつゝ  
○蝶股の博風の下にのり蝶  
乃股小似とつゝとつゝ蝶に水中  
仍りの多々大災とつゝとつゝ  
かな鴨居とつゝも同意や  
○卧房の寢室ともつゝ又閨  
房ともつゝ天子の御寢所と  
夜殿とつゝ

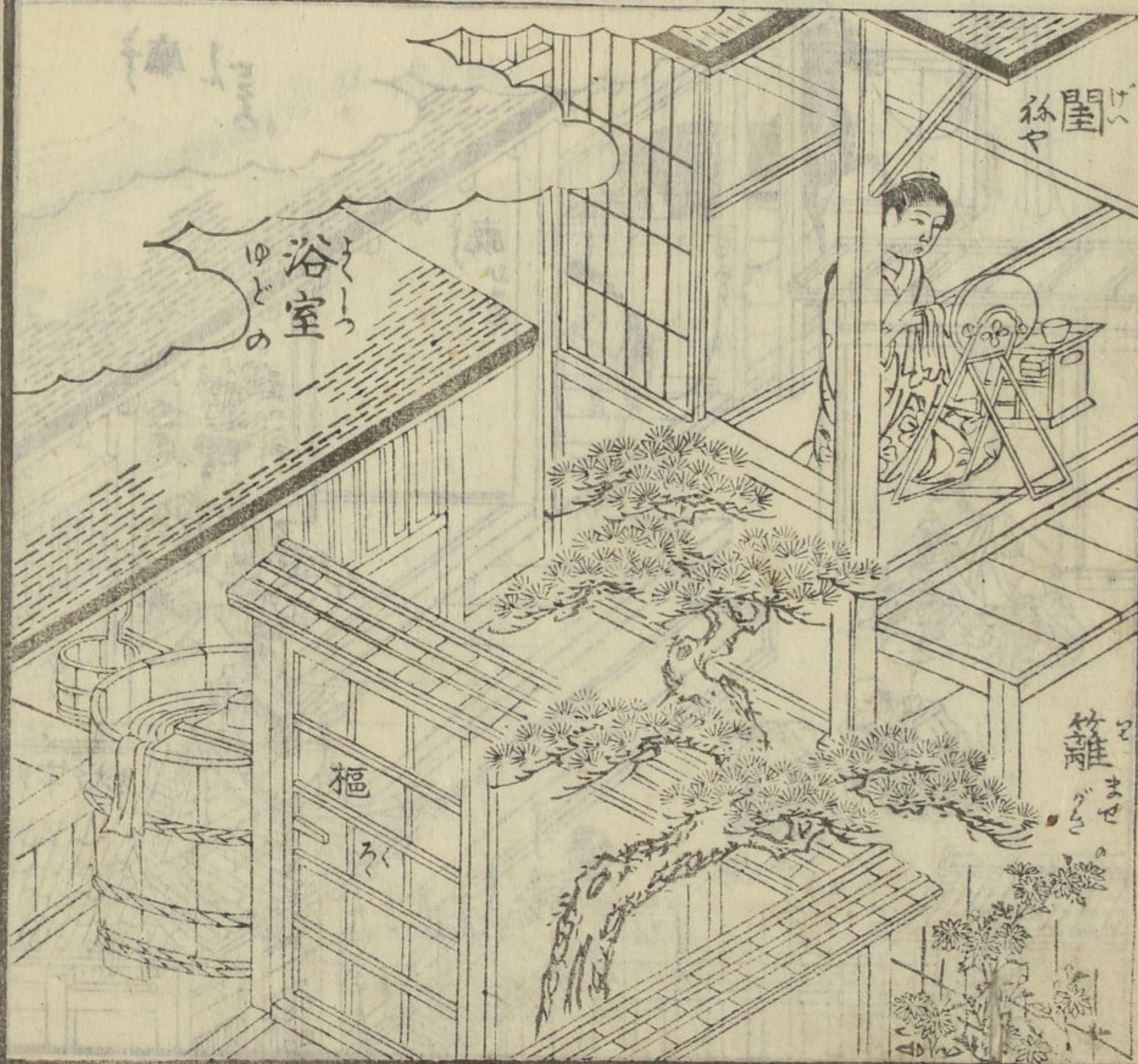


○捷の限門本あり今つゝ  
んの本あり寢門並小同  
○高の外より閉る関なり又  
門扉のうの銀鈕あり又関  
戸の本ありえんの本又鎖  
○鋪首は今按どるふ門又  
襖障ふかどののてて銀あり  
鈕つゝあり  
○壁の城のえと壘とつゝとつゝ  
と粉壁とつゝ書壁板壁など  
わつゝ室の屏蔽あり  
○廳の政とつゝとつゝ檢非  
違使のかりあり公事訃訟  
とつゝとつゝとつゝ  
○廐の馬舎なり猿の異名と  
馬父とつゝとつゝ廐は猿

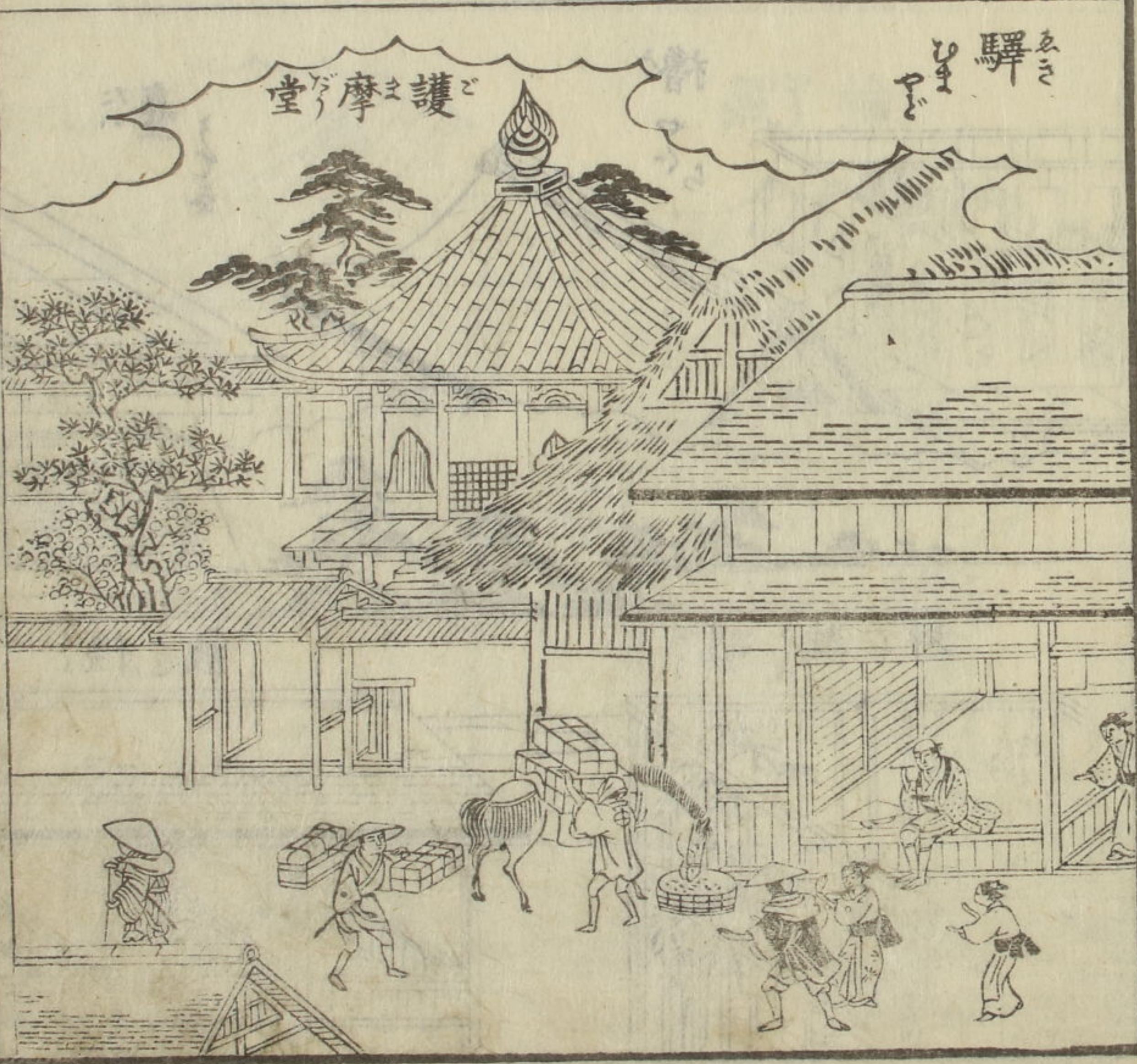


貞書曾甫川夜圖景三

とものく祈禱とるるを  
 厩の上馬とつちく本と猿  
 本との人  
 ○牢獄の罪人と囚とるる  
 臯陶とつちくつちくつちく  
 あり周の代ふの園とつちく  
 籠と書いあやまらかり  
 ○柵の本とわも是とつちく軍  
 陣はく人馬とつちくつちく  
 箒同一俗と駒とつちく馬と  
 ざんしつちく  
 ○閨の婦人の移るから東坡  
 月の夜故郷の妻とつちくつちく  
 詩も閨中唯獨着とつちく  
 ○浴室の沐浴して身とつちく  
 浴の湯殿とつちくつちく  
 寺に風呂屋と浴室と額と

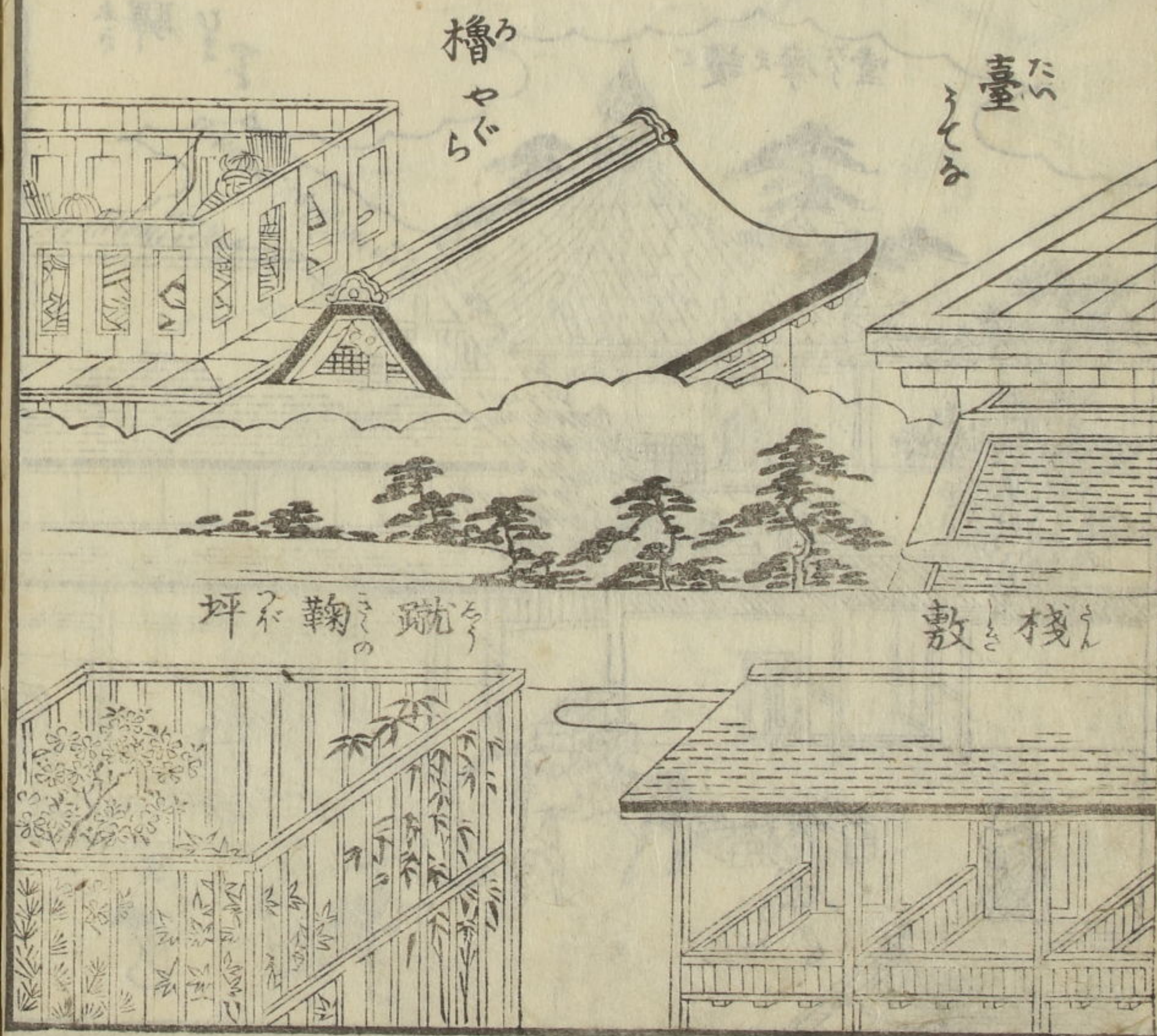


○竹離のませともつちくつちく  
 うつちくつちくつちくつちく  
 陶淵明が詩と採菊東  
 竹離下悠然對南山  
 ○樞のつちくつちくつちく  
 の樞機かりとつちくつちく  
 天の樞かりとつちくつちく  
 樞扉樞かりとつちく  
 ○驛の道中のつちくつちく  
 きつちくつちくつちくつちく  
 とも驛傳ともつちく  
 ○護摩堂の護摩の梵語  
 なるを梵焼と翻譯とつちく  
 まは護摩つちくつちくつちく  
 あり護摩と修ら護摩  
 ころかつちくつちくつちく  
 ○臺の四方にしてたつちくつちく

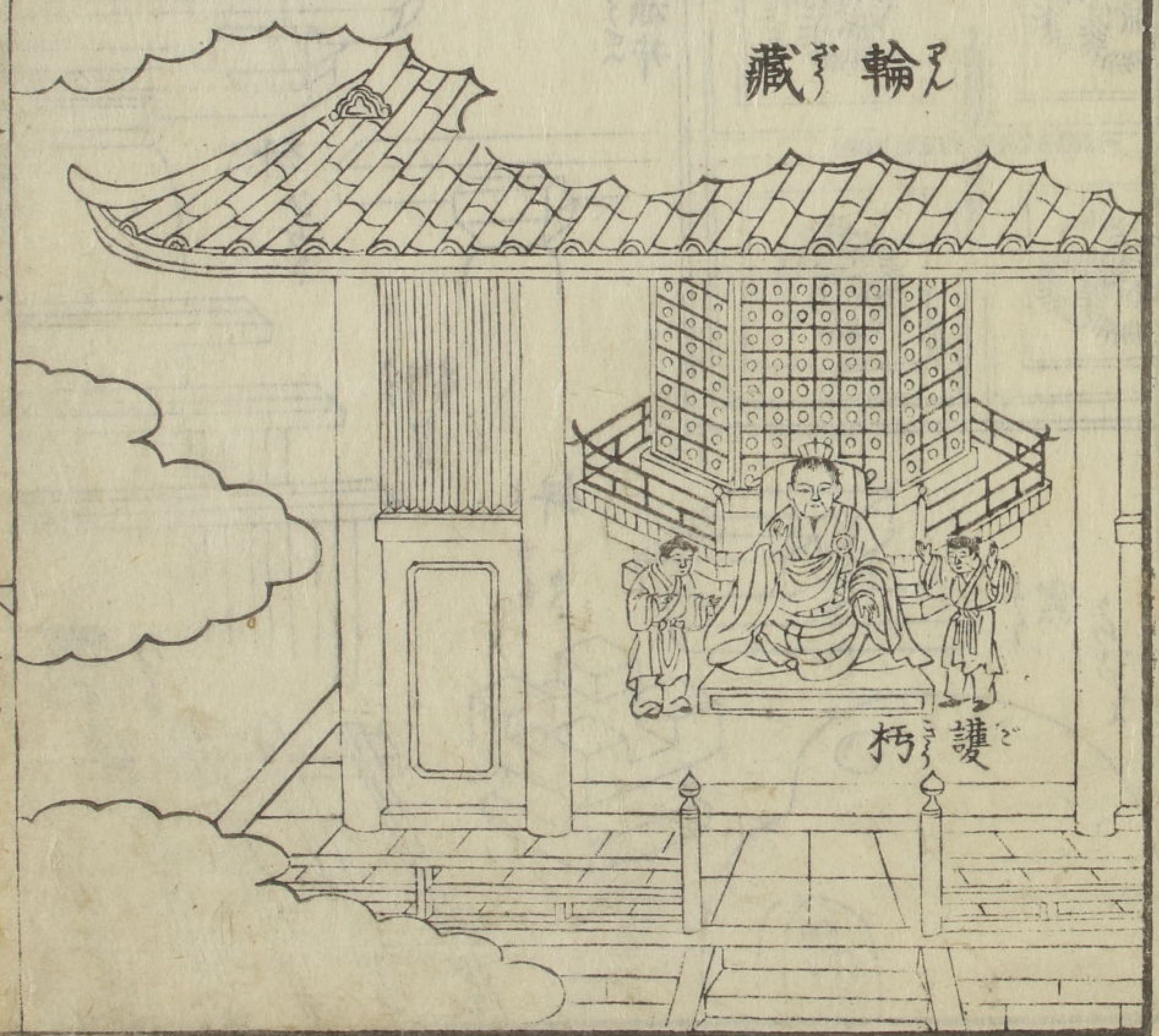




臺といふ臺上に屋を架さるる  
を臺門といふ又樓臺舞  
臺歌臺うてみ  
○櫓はやからり城上の望  
樓なるは狭間なわけ敵の  
多少とて人のとて鉄  
炮といふとあり又戦棚と  
もいふあり  
○棧敷の見物の棚より棧  
敷といふ又いふるやといふ  
へいとも棧敷といふといふ  
をいふ  
○蹴鞠坪といふ鞠蹴場也  
四本つらとて四隅に松竹  
櫻楓といふものあり鞠といふ  
こゝ虫むがむとていふ  
ていふ事なり



○輪藏二切経と入置藏也  
轉やうにうらうらふといふ  
輪藏とも轉藏とも経藏と  
もいふ二度轉藏とまをいふ一  
切経と轉讀ちり道理あり  
糸を房といふ博太といふなり  
佛在世一切経と守護せしむ  
○護朽といふ擬宝珠なり  
橋といふ高欄といふあり  
○研の臂本と俗に書雲と  
とりり付るもの雲臂本と云  
曲研と拱とも樂ともいふ材  
とのとらふあり  
○料の柱の上乃四角の拱  
斗なり方桝拱料拵料  
らものいふ構櫃ともいふ  
○折の屋の横本なり又足がを



頸<sup>くび</sup>を瓜<sup>うり</sup>桁<sup>けら</sup>といふ事<sup>こと</sup>もあ<sup>あ</sup>る  
 又<sup>また</sup>衣<sup>い</sup>類<sup>るい</sup>といふ瓜<sup>うり</sup>衣<sup>い</sup>桁<sup>けら</sup>といふ  
 翡翠<sup>ひすい</sup>畢<sup>ひつ</sup>鳴<sup>めい</sup>衣<sup>い</sup>桁<sup>けら</sup>と柱<sup>ちゆう</sup>子<sup>し</sup>羨<sup>せん</sup>詩<sup>し</sup>よ  
 け<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>り  
 ○棟<sup>たて</sup>の椽<sup>えん</sup>か<sup>か</sup>のり<sup>り</sup>の<sup>の</sup>素<sup>す</sup>乃<sup>の</sup>  
 世<sup>よ</sup>の椽<sup>えん</sup>といふ<sup>いふ</sup>周<sup>しゆう</sup>の世<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>椽<sup>えん</sup>と  
 り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>齊<sup>せい</sup>の世<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>椽<sup>えん</sup>と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>椽<sup>えん</sup>  
 ○藻<sup>そう</sup>井<sup>せい</sup>の天<sup>てん</sup>井<sup>せい</sup>なり<sup>なり</sup>藻<sup>そう</sup>と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>藻<sup>そう</sup>  
 に<sup>に</sup>よ<sup>よ</sup>く<sup>く</sup>藻<sup>そう</sup>井<sup>せい</sup>といふ<sup>いふ</sup>藻<sup>そう</sup>といふ<sup>いふ</sup>  
 井<sup>せい</sup>といふ<sup>いふ</sup>か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>天<sup>てん</sup>井<sup>せい</sup>といふ<sup>いふ</sup>藻<sup>そう</sup>といふ<sup>いふ</sup>  
 なり<sup>なり</sup>天<sup>てん</sup>井<sup>せい</sup>といふ<sup>いふ</sup>書<sup>しよ</sup>も<sup>も</sup>此<sup>この</sup>意<sup>い</sup>なり<sup>なり</sup>  
 み<sup>み</sup>か<sup>か</sup>水<sup>すい</sup>の<sup>の</sup>椽<sup>えん</sup>といふ<sup>いふ</sup>  
 ○窯<sup>かま</sup>の瓦<sup>わ</sup>竈<sup>かま</sup>なり<sup>なり</sup>か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>瓦<sup>わ</sup>竈<sup>かま</sup>  
 か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>竈<sup>かま</sup>同<sup>どう</sup>大<sup>だい</sup>の<sup>の</sup>椽<sup>えん</sup>といふ<sup>いふ</sup>椽<sup>えん</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>  
 ら<sup>ら</sup>瓜<sup>うり</sup>入<sup>い</sup>柴<sup>しば</sup>といふ<sup>いふ</sup>椽<sup>えん</sup>といふ<sup>いふ</sup>椽<sup>えん</sup>  
 炭<sup>すす</sup>といふ<sup>いふ</sup>椽<sup>えん</sup>といふ<sup>いふ</sup>椽<sup>えん</sup>といふ<sup>いふ</sup>椽<sup>えん</sup>

